戦後日本の『ルバイヤート』

杉田英明

［目次］

一　小川亮作譯『ルバイヤート』
（1）音数上の工夫
（2）原詩との距離
（3）評価と影響
二　沢英三訳「ルバイヤート」

一　小川亮作譯『ルバイヤート』

戦後間もなくの一九四八年十二月、岩波文庫の一冊として刊行された小川亮作譯『ルバイヤート』[1]は、一九二〇年十月の荒木茂「オムマ、ハヤムと「四行詩（ルバイヤット）」全譯」[2]に次ぐ、日本で二番目のペルシア語原典からの全訳である。小川亮作（一九一〇―五一年）は新潟縣岩船郡海老江村（のち金屋村、荒川町。現在の村上市）出身、一九二九年旧制新潟縣立村上中學校（現在の村上高等学校）卒業後、同年三月にハルビンの日露協會學校（のちの哈爾濱學院）に入学してロシア語を習得[3]、三二年に外務省の留学生試験に合格し、三五年まで三年間イランの首都テヘランに留学、このあいだにペルシア語を学習し、ペルシア文学に興味を抱いたらしい。三六年外務省電信課書記生[4]、三七年から四一年まで在アフガニスタン國公使館書記生、帰国後は歐亞局第三課（四二年に歐亞局が亞米利加局と統合後は政務局第五課）の所属となり、四九年に退任[5]、その年には東京大学でペルシア語の講師も務めている[6]が、研究生活に入ろうとする矢先に急逝した。他の主要な著作として、以下が挙げられる。

・『アフガニスタンの概觀』外務省歐亞局第三課、一九四一年十二月[7]。
・『支那、南洋及印度の回教徒』外務省歐亞局第三課、一九四

二年七月[8]。

・『印度の回教徒』地人書館、一九四三年四月[9]。

・『金の燭台――イランの昔話』小川亮作・川崎珪一編、白木博也挿畫、柳田國男・川端康成監修、世界昔ばなし文庫、彰考書院、一九四八年十一月[10]。

・グリボイェドフ『智慧の悲しみ』世界古典文庫91、日本評論社、一九四九年四月。のち、岩波文庫、一九五四年八月[11]。

いずれも著者の現地体験や、ロシア語・ペルシア語の知識を生かした作品である。

岩波文庫版『ルバイヤート』は、イランの文学者サーデク・ヘダーヤト Sādeq Hedāyat（一九〇三―五一年）の校訂版[12]に基づく全訳である。ヘダーヤトは、歴史的にハイヤームの真作と目される十四首を試金石に、独自の鑑識眼によって全百四十三首を選んだため、ボドレー写本やニコラ版・ホワインフィールド版に収録されていない作品も多く含まれている[**附表1**]。従って小川訳は、これまで日本語訳されたことのない[13]新たな四行詩を多く紹介する重要な契機ともなった。

（1） 音数上の工夫

岩波文庫版『ルバイヤート』の前史としては、大久保幸次（一八八七―一九五〇年）率いる回教圏研究所の機関誌『回教圏』に掲載された一連の論考と訳が存在する。まず一九四一年十一月の寄稿「官能の詩人オマル・ハイヤム[14]」で小川は、詩人とその作品について概説したのち、「私もいつか、なるべく原詩の形をくづさないやうにして、これを直接ペルシヤ語から、譯出して見たいと思つてゐる」と付記している。この希望は三年後、岩波文庫版と同じヘダーヤト版に基づき、一九四四年五月から九月まで四回に亘って訳載された「オマル・ハイヤーム詩抄[15]」によって実現したが、第九十二歌まで掲載したところで中断、雑誌自体も同年末で廃刊になっている。

この訳が岩波文庫版と大きく異なるのは、五・七音を基調とした文語体を用いている点であろう。岩波文庫版の「解説」で小川が自ら韻律の説明に使用している第二十二歌を原文とともに例に挙げると、

あはれこの長き旅路に
到着と或[ある]はいこひの場所もがな
一萬年を經りにし時に土の中より
草の如くも萠え出づる望みあらばや[16]

ey kāsh ke jāy-e āramīdan būdī
yā īn rah-e dūr-rā rasīdan būdī
kāsh-az pey-e ṣad hazār sāl-az del-e khāk
chon sabze omīd-e bar-damīdan būdī[17]

（ああ、休み場所があったらいいのに／あるいはこの遠い道の果てに辿り着けたらいいのに／十万年後に土のなかから／若草のように芽生える希望があればいいのに）

のように、音数は「五七／五七五／七七七／七五七」と完全に五と七から成り立ち、原文の「十万」を「一萬」としているほかは訳も正確である。これが岩波文庫版では、

あゝ、全く、休み場所でもあったらいゝに、
この長旅に終點があったらいゝに。
千萬年をへたときに土の中から
草のように芽をふくのぞみがあったらいゝに！[18]

と口語体に変化した。これは「口語にした方がよいとの佐藤春夫氏のすすめ」があり、「ハイヤーム自身の文體が、今日どんな教育のないイラン人にきかせても容易に理解されるような、現代口語と殆んど文脈の異らない平易なもの」[19]である点にも配慮した結果であるという。第一・二・四句の末尾が「あったらいゝに」と同一の言葉で繰り返されているのは、原詩の第一・二・四句末に共通な“-īdan būdī”――“-īdan”が脚韻、“būdī”は「ラディーフ」radīf すなわち反復語句と呼ばれる――に合わせた工夫である。相変わらず「十万」が「千萬」となっているのは、訳者の単純な誤解であろう。

この訳の音数は「六七七／七五七／七五七／六八七」で、厳密な七と五ではないが、ある程度はそれを意識していることが窺われる。しかし、訳者自身はこの訳が次のような、別の原理に基づいて組み立てられていると説明する。[20]

ああまつたく｜やすみばしよ｜でもあつたら｜いいに　15 (21)
――――（（　（（ー（（　（（――（（　）
このながたび｜に しゆう てん｜が あつ た ら｜いいに　14 (20)
（（（（（（　ー ――　――　ー ――（（　）
せん まん ねん｜を へ た と き｜につ ち の な｜かから　14 (19)
――――――　ー（（（（　ー（（（（　）
へさのように｜めをふくのぞ｜みがあつたら｜いいに　17 (21)
（（（ ――（　（（（（（（（　（（――（（　）

「ー」と「（」は元来、ペルシア詩の長音節と短音節を表わす記号であり、「ー」は詩脚の区切り、「）」は長音節「ー」または長音節＋短音節「ー（」を示すために小川が独自に用いた記号である。[21]末尾の数字は「ー」「（」「）」の合計数、丸括弧内は「日本式音數」（とくに定義されていないが、平仮名表記した場合の仮名文字の数を指すらしい）[22]を示している。この数字（15・14・14・17）は一見不規則だが、「（」二つを「ー」一つに換算して「）」も「ー」に置き換えると、各行の長音節数はすべて十で統一されていることが判る。小川によれば、これはルバーイーの音節数に合わせた措置であるという。すなわち、この記号を原詩に適用し、音節数を各行末尾の丸括弧内に示すと、

ey kā sh ke｜jāy-e ā ra｜mī dan būdī　(12)
ー ー（（｜ー（ー（｜ー ー ー｜ー
yā īn rah-e｜dū r- rā ra｜sī dan būdī　(12)
ー ー（（｜ー（ー（｜ー ー ー｜ー
kā sh-az pey-e｜ṣad ha zā r｜sāl-az del-e｜khāk　(13)
ー ー（（｜ー（ー（｜ー ー（（｜）

chon sab ze o | mī d-e bar-da | mī dan bū | dī
— — ((| — (— (| — — — | —　　(12)

のように、各行の音節数は十二ないし十三であるが、「(」二つを「—」に換算し「⎝」も「—」に置き換えると、やはり各行の長音節数はすべて十となる。これをさらに一般化すると、

五、六、七、八等の日本式音数を二つ乃至三つずつ組み合わせ（七七、五七五、五六七、六六七等）、しかもこれをアラビア式に數えた音數の和がなるべく十三に近くなるように、またそれを長音歩單位に直して十單位乃至十單位半になるようにして各行を作り、更にこれにルバーイイ式な脚韻をも導入しさえすれば、ルバーイイの詩形をそのまま邦譯中に實現することも不可能ではない[23]

という表現になる。ここで「アラビア式」とあるのは、「ペルシア式」ないし「イラン式」と言い換えるべきであろう[24]。また「十三に近くなるように」とは、右の例では音節数は十二または十三であったが、ルバーイーの韻律は詩脚の組み合わせで二十四種類（第四詩脚のアンケプスを一通りと見做せば半分の十二種類[25]）存在し、それによって音節数も十から十三まで変動するため、最大値を取って「十三」としたのであろう。「長音歩」とは本稿で言う「長音節」、「十單位乃至十單位半」としたのは、第四詩脚が長音節「—」であれば十単位、長音節＋短音節「—(」であれば十単位半になるという意味である。なお、ここでの「音節」はあくまでもペルシア詩の韻律で言う「長音節」「短音節」であり、日本語自体の音節区切りとは異なっているが、本稿では便宜上この用語を使うことにしたい。

このように、原詩の音節数を日本語の音数に対応させる訳詩の試みとしては、森鷗外（一八六二—一九二二年）主宰の新聲社同人による訳詩集『於母影[26]』における「句譯」の先例が挙げられる[27]。ただし、小川の説明の大きな問題は、日本語の「音數」を数えるさいの長短の指定がきわめて恣意的な点である。前出の訳詩で言えば、長音（ー）や促音（っ）、撥音（ん）を含む音節——それぞれ例えば「ああ」「よう」、「まつ」「あつ」、「せん」「まん」など（一音節二モーラ）——を長音「—」で示すのはよいとして、それ以外に「やすみばしょ」「ながたびに」「せんまんねんを」「へたときに」の傍点部分が長音で読むよう求められている。勿論、指定されればそのように読むことは可能だが、指定がなければ普通は短音になるところである。この第二十二歌、ならびに同じ「解説」中で例示されている第四十四歌を除くと、残りの百四十歌についてはこうした読み方の指定がないので、せっかく訳者が「音數」を考慮して訳したとしても、その苦心は読者の側に反映されないで終わってしまう。結局、読者に明瞭に伝わるのは、「あったらいいに」の繰り返しのような、原詩のラディーフ（反復語句）や脚韻を模倣した部分だけになる[28]。

以下、いくつかの訳詩を例示してみよう。まずは第九十八歌である。

一壺の紅（あけ）の酒、一巻の歌さえあれば、
それにただ命をつなぐ糧さえあれば、
君とともにたとえ荒屋（あばらや）に住まおうとも、
心は王侯（スルタン）の榮華にまさるたのしさ！[29]

tong-ī mey-e la'l khāham-ō dīvān-ī
sadd-ē ramaq-ī bāyad-o neṣf-ē nān-ī
v-āngah man-o tō neshaste dar vīrānī
khoshtar bovad-az mamlakat-ē soltān-ī[30]

（ルビーの色した一壺の酒と一巻の詩集が私は欲しい／命を繋ぐ糧と半切れのパンがあればよい／それから私とあなたが曠野に座せば／それは王者の王国よりも好もしい）

冒頭の「一壺」は「ひとつぼ」「いっこ」の二通りの訓みが考えられるが、以下で見るように、各行の長音節数が十になるように音の長短を指定しようとすると、「ひとつぼ」ではどうしても十一以下に収まらないので、必然的に「いっこ」と訓まざるをえなくなる。「酒」も「さけ」ではなく「しゅ」と訓む必要がある。それに伴い、「一巻」も訓読みの「ひとまき」ではなく、音読みの「いっかん」とするのがよいのだろう。第一・二行の「さえあれば」の繰り返しが、原詩のラディーフ（反復語句）を模した部分である。

ごく普通に読んだ場合の各行の音（拍＝モーラ）数は「四四五七／五七七／六八六／四五七四」で、口調がよいとは言えない訳しぶりである。しかし、訳者の言うように、各行がペルシア詩の韻律で言う長音節（日本語の長音）換算で十ずつになるように長音と短音を組み合わせてみると、例えば次のような分析が可能になる。

いっこのあけ　—のしゅいっかん　—のうたさえ　—あれば
——（（（（　（（——　—（（（（　）
それにただ—いのちをつな　—ぐかてさえ—あれば
（（—（（　（（（（（（　—（（（（　）
きみとともに—たとえあばら　—やにすまおう—とも
（（（（（（　（（（（（（——　）
こころはス—ルタンのえい—がにまさるた—のしさ
（（（（—（　（——（——　（（（（（（　）

各詩脚の長音節・短音節の排列は、小川が実際に「解説」で第二十二歌と第四十四歌に用いている十一種類[31]のなかから八種類を選択した。各行末の「〜」も「—」に置き換えれば、長音節を一単位とした各行の音節数は十に統一される。この場合、第一行の「いっかんの」、第二行の「それに」「つなぐ」、第四行の「こころは」の傍点を付した言葉が、通常とは異なる長音で読む必要がある箇所となる。実際にこのように音読ないし朗誦するのはやや不自然であるが、訳者が確かに各行長音節十単位という原則を守って訳語を作成していることは確認できるだろう。

次に、原詩との比較で訳詩を見ると、「半切れのパン」neṣf-ē nān-ī に対応する訳語は完全に脱落し、「王国」が「榮華」と意

訳されるなど、音数の制約から来る乖離が見られる。第三行の「曠野に座せば」neshaste dar vīrānī を「荒屋に住まおうとも」と訳した結果、本来は恋人との郊外への遠足といった趣きが、貧困生活を送る夫婦の情景に変わってしまったことは否めない。

次に掲げるのは第九十五歌である。

バグダードでも、バルクでも、命はつきる。
酒が甘かろうと、苦かろうと、盃は満ちる。
たのしむがいゝ、おれと君と立ち去ってからも、
月は無限に朔望をかけめぐる！[32]

chon ʻomr be-sar rasad che baghdād-o che balkh
peymāne cho por shavad che shīrīn-o che talkh
khosh bāsh ke baʻd-az man-o tō māh basī
az salkh be-ghorre āyad-az ghorre be salkh[33]
（命が尽きるのなら、バグダードでもバルフでも同じこと／杯が満たされるなら、甘くても苦くても同じこと／楽しむがいい、私とお前の亡きあとも、月はいつまでも／晦から朔へ、朔から晦へと巡り続けよう）

第一・二・四行目の末尾が「つきる」「満ちる」「めぐる」と押韻する。この訳詩も、各行が長音節換算で十になるためには、例えば次のように分析する必要がある。

バグダードで｜もバルクで｜もいのちは｜つきる
（（——（（　—（（（（（　）
しゅがあまか｜ろうとにがか｜ろうとはいは｜みちる
（—（（（　——（（（（——（　）
たのしむが｜いいおれとき｜みとたちさっ｜てからも
（（（（（—　——（（（（（　（（（（——　）
つきはむ｜げんにさへ｜ぼうをかけ｜めぐる
（—　—（　——（（　——（（　）

訳詩の二行目、「盃」は「さかずき」ではなく「はい」と読まないと、長音節換算で一行が十に収まらない。これに呼応して「酒」を「しゅ」と音読みにすると音節の配分がうまくゆかないので、直後の助詞「が」を長音で読むか、「さけ」と訓読みにして「が」は短音で読むか、いずれかの対応の必要がありそうである。一行目「バグダードでもバルクでも」、三行目「たのしむが」、四行目「月は無限に朔望を」の三つの助詞と「つき」の「き」が、通常とは異なり長音で（「つきーは｜無限にー朔望をー」と）読むことを要請される。普通の読み方なら「七五七／八六六／七六八／七五五」の音（拍＝モーラ）数になるのだが、訳者の意図する朗誦方法はこれとは別のところにあるようだ。

訳は原詩の意味をよく汲んで作られている。とくに第四行「晦から朔へ、朔から晦へ……巡り続けよう」az salkh be-ghorre āyad-az ghorre be salkh という「晦」「朔」の重複を「朔望」の二文字に収め、繰り返しを「かけめぐる」とした上で、原語 “basī”（直訳は「多く」）を「無限に」と強調して訳したのは見事である。

もう一編、これもよく知られた第七十九歌を、『回教圏』所収

の文語訳ともども掲げておこう。

吾が玉の緒の絶えなむ日
美酒(うまざけ)に末期の息を引きとらめ
さて復活の日となりて
會ひたくば酒場の戸口にて吾を待て[34]

死んだら湯灌は酒でしてくれ、
野の送りにもかけて欲しい美酒(うまざけ)。
もし復活の日ともなり會いたい人は、
酒場の戸口にやって來ておれを待て。[35]

chon dar ghodharam be-bāde shū'īd ma-rā
talqīn ze sharāb-e nāb gū'īd ma-rā
khāhīd be-rūz-e ḥashr yābīd ma-rā
az khāk-e dar-ē meykade jū'īd ma-rā[36]
(死んだなら、私の体を酒で清め／読経代わりに澄んだ酒で
讃えておくれ／裁きの日に私に会いたくなったなら／酒場
の戸口の土のなかから私を探せ)

文語訳は「七五／五七五／七五／五七七」と綺麗に五音と七音でまとめているが、「酒で清め」be-bāde shū'īd,「読経」talqīn といった原詩の文言を生かし切らずに「美酒(うまざけ)に末期の息を引きと」ると、やや大雑把に訳した結果、「玉の緒の絶え」る、「末期の息を引きと」ると、同義の表現を二回繰り返している点が物足りない。口語訳はこの点が、「湯灌」「野の送り」に反映されている。また両訳とも、四行目の「私を探せ」jū'īd ma-rā という積極的な態度を促す命令が「待て」となっているのは、原意からやや乖離した印象である。

口語訳に訳者が籠めた朗誦方法を分析してみると、例えば以下のようになるだろう。

しん だ ら ゆ ー かん は さ け ー で し て く ー れ
――（ ー（ ――ー（（ ー（ ー（ ）
の の お く り ー に も か け て ー ほ しい う ま ざ ー け
（ ー（（（（ （ ー（（（ （ ――（（（ ）
も し ふっ か つ ー の ひ と も な ー り あ い た い ー ひ と は
（（ ――（（ ー（（（（ ー ―― ――ー ）
さ か ば の と ぐ ー ち に や っ て き ー て お れ を ー ま て
（（（（（（ （（ ――（（ ー（（ ー ）

この排列では「死んだら湯灌は酒でしてくれ」「野の送りにもかけて欲しい美酒(うまざけ)」「もし復活の日ともなり」「やって來ておれを待て」のように、傍点部を長音で読むかなり不自然な朗誦にならざるをえない。

(2) 原詩との距離

このように、小川訳は音数にこだわると同時に、脚韻や反復語句をも重んじた結果、原典訳という触れ込みから想起される現代の感覚とは裏腹に、かえって原詩の語義を犠牲した意訳に

なっている場合が少なくない。音数を揃え、末尾を同一語句で統一するために第一・二・四行に原文にはない間投詞「あゝ！」を補ったり（第五十一歌）、第三行「支度をなさい」に合わせて第四行の未来形「洗おう」khāham shost を命令形で「洗いなさい」と訳したり（第九十四歌）、あるいは末尾の脚韻を考えて「たのしめよ」「早くせよ」と原文にない言葉を補ったり（第百二十一歌）しているのは、その最も判りやすい例であろう。原語との対応という観点から見る限り、小川訳にはほとんど各首ごとに齟齬を指摘しうるが[37]、そのなかには例えば、第二十一歌の前半二句のような巧みな処理も見られる。

歡樂もやがて思い出と消えようもの、
古き好をつなぐに足るは生の酒のみだよ。[38]
aknūn ke ze khosh-delī be joz nām na-māND
yek ham-dam-e pokhte joz mey-ē khām na-māND[39]
（歓楽の名前以外はあとに留まらぬ以上／円熟した一人の親友として残るのは生の酒だけだ）

ここでは、「名前以外はあとに留まらぬ」を「思い出と消えよう」、「円熟した一人の親友として残る」を「古き好をつなぐ」と和らげて訳すことで原義を生かしている。もっとも原文では「生の」khām と「円熟した」pokhte（原義は「料理された」）という反対語を同一半句内に配置する反意語法（taḍādd / ṭebāq）の遊びが用いられているのだが、そこまでは訳に反映されていない。

第九十七歌の後半二句は以下のごとくである。

だがつもる齢の盃になお君の酒をよろこぶのは、
頭に霜をいただいても心に春の風が吹くから。[40]
bā mūy-e sepīd-e sar khosh-am k-az mey-e tō
pīrāne-sar-am bahār-e del tāze shod-ast[41]
（頭の白髪にも拘わらず私が楽しいのは、君の酒のお蔭で／私が老齢になっても心の春が甦るからだ）

「頭の白髪にも拘わらず」bā mūy-e sepīd-e sar を「頭に霜をいただいても」、「老齢になっても」pīrāne-sar-am を「つもる齢の盃に」、「心の春が甦る」bahār-e del tāze shod-ast を「心に春の風が吹く」と、「霜」「盃」「風」といった原文にない言葉をさりげなく補って和文脈に置き換えて訳している点は見事である。これも意訳として十分許容範囲に収まるであろう。

もう一例、第百十四歌の後半二句を挙げておこう。朝、何故鶏が声を上げて鳴くか君は知っているかという前半二句に対する答えである。

朝の鏡に夜の命のうしろ姿が
映っても知らない君に告げようとさ。[42]
ya‘nī ke namūdand dar-āyīne-ye ṣobḥ
k-az ‘omr shab-ī godhasht-o tō bī-khabar-ī[43]
（つまりそれは、朝の鏡のなかで／君が知らぬうちに生涯の

一夜が過ぎ去ったことを示すためさ）

ここでも原文には「夜」shab と「朝」ṣobḥ の反意語法が用いられている。小川訳はそれをも生かしつつ「夜」を擬人化し、「過ぎ去る」を「夜という人物が立ち去る」と読み替えて、「朝の鏡のなかで」dar-āyīne-ye ṣobḥ「生涯の一夜が過ぎ去った」az ʿomr shab-ī godhasht ことを、「朝の鏡に夜の命のうしろ姿が映」ると巧みに表現し直している。朝、自分の姿を鏡に映して見る人間が、視界から夜が立ち去ろうとしているのに気づかず、鶏の鳴き声によって警告されるという場面が髣髴する。

こうした美点の反面で、小川訳には結果的に誤解や誤訳とも見做しうる、原詩からの乖離が大きい事例も散見する。「苦しみに耐えよ」bā dard be-sāz を「心の悩みはすてよ」（第三十二歌）、「我慢せよ」tan zan を「胸をたたけ」（第百三十一歌）としているのはこの範疇に入るだろう。[44] また、「輪廻の環」chanbar-e charkh[45]（第十八歌。原義は「天輪」）や「煉獄」jaḥīm[46]（第九十一歌。原義は「地獄」）のように、仏教やキリスト教の概念を取り入れているのは一般読者には判りやすい一方で誤解も招きかねず、評価が分かれるところかもしれない。

（3）評価と影響

このように、小川訳はともすれば原詩との距離が大きくなりがちな反面、短く簡潔で判りやすい日本語表現のお蔭で、ルバーイーの雰囲気を読者に伝える効果はあったように思われる。さらに岩波文庫の価格の手頃さ[47]（初刊時には六十円。一九五〇年一月以降は★★）も手伝って、この詩集を手にする一般読者も多かったことだろう。[48] さらに原典訳という触れ込みから、研究や教育の分野で参照される機会も増えていったように思われる。[49]『ルバイヤート』への関心が深かった英文学者の吉田健一（一九一二―七七年）も、[50] 戦後すぐに少人数の仲間で始めた「鉢の木会」に触れて「カイヤムの「ルバイヤート」を訳した故小川亮作氏に来ていたゞいたのは、今では一つの思い出である」[51]と述べているので、その訳業を評価していたらしい。

小川に文語訳から口語訳への変更を勧めたという佐藤春夫（一八九二―一九六四年）は、『私の享楽論』（朝日新聞社、一九五六年十二月）の第四章「酒の詩、恋の詩 ―― 文学に現はれた快楽の一斑」において、漢詩や大伴旅人（六六五―七三一年）の酒讃歌に続いてハイヤームの詩に言及し、小川訳を六編ほど引いた上で、

> ほんの数章を引用しただけではあり、訳も原典によるといふ特色はあるが、まだ万全のものとも思へないが、オマル・ハイヤームの「四行詩集」といふものの香（にほひ）はこれでも察しはつくと思ふ。[52]

とやや辛口の評価を下している。春夫は小川訳刊行以前から『ルバイヤート』の存在は当然認識していたであろうが、この訳によってようやくその全貌を把握したものと思われる。そして、これまで「幾種かの四行詩集（ルバイヤート）が飜訳されてなかには相当な名訳

と評判されたものもありながら、（中略）我国では決して売れない書物となつてゐるといふ事実」を「怪しむべき」こととし、その理由を次のように説明する。

この堂々たる哲学詩集は日本人の考へてゐる詩の先入観念に一致する殉情的詩篇ではなくて知性に勝つた観念抒情であることが、わが国人の肌合になじみにくく理解を妨げるところへもつて来て、全詩章を一篇のものと読みこなすだけの能力がなくて、ただ断片的に一章一章を読み味つては、漢詩の絶句などと同様に考へ、さうして既に見慣れてゐる将進酒などと同一の陳腐な詩のやうな気がして、（中略）その詩趣の清新を掬するに到らないのではないだらうか。[53]

ハイヤームは虚無思想の詩人というよりは、「エピキュラスのやうに生涯を学術に委ね」、理知を基盤としながら「李白のやうな詩酒生涯を送つた典型的な快楽哲人」[54]であるというのが春夫の見立てである。また彼が「全詩章を一篇のものと読みこなす」必要性を説くのも、『ルバイヤート』は「ほぼ一貫した統一の下に編まれ」、「その一大建築のやうな壮観を讃美すべきもの」[55]だという、小川訳から得た信念に基づいている。これは、小川訳の底本となったヘダーヤトの校訂版が伝統的なペルシア語詩集の慣行とは異なって主題別に排列されている事実に加え、ハイヤームの「眞作の大部分が」「網羅されていることを確言し得る」[56]という訳者解説に従った解釈であろうが、実際にはヘダーヤト版の選択も絶対的な基準に依拠しているわけではなく、そこから導かれるハイヤーム像もあくまで一つの解釈にすぎないことは注意する必要がある。

一方、小川亮作と同じ滿洲國立大學哈爾濱學院（日露協會學校の後身）の卒業生でもあるロシア文学者・評論家の内村剛介は、「『ルバイヤート』の訳本は種々あるが、小川亮作の仕事を最上とするというのがほとんど定説である」[57]と述べ、

『ルバイヤート』の原典訳を試み、ペルシャ語を口誦可能な日本語（傍点内村）へと移す。空前絶後の作業であってその果実は永く口誦伝承されるにちがいない。それゆえぼくらはこれを小川に固有の制作と措く。オマル・ハイヤームの伝達に当って小川は漢字にことこまかにルビを振り、確実に小川固有の刻印を押している。口誦朗誦に際しては小川の指示に従えというのである。ここでは――小川の制作にあっては――目頭だけで字面を追うさかしらな近代日本詩人は拒まれている。[58]

と評価する。しかしこれはいささか過褒と言うべきであろう。先に見たように、口誦朗誦に関する「小川の指示」があるのは全百四十三首のうち二首のみであるし、「一壺」「酒」「盃」のように肝腎な箇所にルビが振られていない。また、指示通りに読んだからといって、それがただちにペルシア語のルバーイーの韻律に対応するわけでもない。内村の小川訳評価には、末尾の「解説」に影響を受けた部分が多いように思われる。

最後に、小川訳の文学的影響の一例として、哲学者・歌人の安藤孝行（たかつら）（号は白雲山人。一九一一―八四年）による「唱和」の試みにも触れておきたい。安藤は京都帝國大學文學部哲學科卒業後、旧制第四高等學校や金沢大学、立命館大学、岡山大学の教授を歴任、アリストテレスをはじめとする専門の哲学研究の傍ら、晩年になって『唐詩唱和』（明治書院、一九七二年十月）や『唱和の遊び』（桜楓社、一九七四年八月）、『西詩唱和　葦の葉笛』（白雲山房、一九八二年一月）など、自ら「唱和」と呼ぶ一連の漢詩や西洋詩の自由な翻案・翻訳の試みを上梓している。安藤によれば、「唱和」とは、

> 原詩の辞句や内容を忠実に日本語に移すのではなくて、原詩を読むことに促されて得た感興を日本の詩形、特に和歌と俳句の形式を借りて創作することである。いわゆる詩歌合というものに近い。したがって理想とするところは不即不離、つまり全く同じでもなければ、全く別でもないという微妙なかねあいを娯しむのである。[59]

と説明されている。これは中国における応酬詩や次韻、日本の相聞や歌合わせ、連歌、俳諧などの唱和の遊びの伝統を現代に甦らせようとする意図に基づいた作業である。その一環として、小川亮作訳『ルバイヤート』に基づく白雲唱和／おまあるはいやあむ『詩集　るばいやあと』[60]が発表されている。安藤は、小川訳が「比較的忠実に原詩の意味を伝えていると思われるので、拙訳はこれをテクストとしたが、こういう散文訳では詩としての妙味は望めまい」[61]とするが、たまたま眼科病院に入院したさい「手もとにあった小川氏の訳本一冊を携行したのが縁で、真夏のむし風呂のような病室で、痛む眼を半眼にしながら、二日間に一気に全篇を短歌に訳出して、文庫本の余白に書き込んだ」[62]のが彼の短歌訳全百四十三首であるという。

安藤もヘダーヤト版の主題別排列を活かし、春夫の言うように「全詩章を一篇のものと」見做して、全体を短歌の連作のような形に構成している。ここでは見本として、本稿で例示した小川訳数首の唱和歌を『詩集　るばいやあと』より掲げておこう。

79　酒もちて屍を洗へ蘇りまた会ふべくは酒ひさぐ店
95　限りなく月はみち又欠くるらむ我君共に去りなむ後も
98　皇帝の富にもまして我が欲るは一壺の酒一巻の歌

この種の試みは日本の『ルバイヤート』移入史のなかでも空前絶後であろう。

二　沢英三訳「ルバイヤート」

小川訳の刊行から十二年後の一九六〇年、戦後二番目の原典訳である澤英三（一八九六―一九七八年）による「ルバイヤート」が、『世界名詩集大成』の一環として発表された[63]。澤は小川亮作

と同じ新潟の出身で、東京外國語學校（のちの東京外国語大学）ヒンドゥスターニー（印度）語科を一九二〇年に卒業、二一年から二三年までの三年間の印度自費留学後、一九二三年九月に大阪外國語學校の印度語部に着任、以後一九六一年三月まで四十年近くに亘って同校でウルドゥー語とペルシア語を教えた。[64]そのあいだ、一九二八年にペルシアとイギリスに赴いている。主な著作は以下の通り。

・『印度文典』丸善、一九四三年二月。[65]
・『日印會話提要』三省堂出版、一九四五年二月。[66]
・『印度語入門』朝日新聞社、一九四八年十一月。[67]
・サァディー著／澤英三譯『ゴレスターン』岩波文庫、一九五一年十月。
・『インド、パキスタンの習俗』毎日新聞社、一九五二年七月。[68]
・『インド・パキスタン会話』アジア語学双書、江南書院、一九五七年四月。[69]
・『インド文典』発行＝アーリヤ学会、発売＝丸善、一九六〇年四月。[70]

「ルバイヤート」訳を収めた『世界名詩集大成』18（東洋篇）では、他にパキスタンの国民的詩人ムハンマド・イクバール Muhammad Iqbāl（一八七七―一九三八年）のウルドゥー語詩集『鈴の音』*Bāng-e Darā*（一九二四年）と、ペルシア詩人ハーフィズ Ḥāfiẓ Shīrāzī（一九二六年頃―九〇年頃）の『詩集』*Dīvān* の翻訳を担当している。

澤は当初北インドに留学し、「ラクナウ市で、キリスト教徒である一老印度人の家庭教師から」[71]ペルシア語を学んだ。しかしその発音は、現地で行なわれている「印度流の舊式なペルシヤ語の發音」だったため、一九二八年に「とう〳〵私は自費でペルシヤ行を決行」、「特に、發音の勉强に努め」、翌年からペルシア語の授業も担当することになったという。[72]実際、右の著作のうち、サァディー Saʿdī（一二一〇年頃―九二年頃）によるペルシア散文学の最高傑作『ゴレスターン』*Golestān* すなわち『薔薇園（グリスターン）』は、その後に出た蒲生禮一訳『薔薇園――イラン中世の教養物語』（平凡社東洋文庫、一九六四年二月）の「グリスターン」という旧発音とは異なり、完全にペルシア語現代音を用いている。

一九三四年七月、外務省留学生としてイランに向かう途中の大阪で東京外國語學校の先輩である澤の出迎えを受けた井上英二（一九一一―八六年）は、初対面の彼から「どことなく大人（たいじん）の風格を備え悠揚せまらざる態度の方」[73]という印象を受け、一九四一年四月に大阪外國語學校印度語部に入学した陳舜臣（一九二四―二〇一五年）は澤について、「学究ということばが、ぴったりの先生で、良い意味での世間知らず」、「学問の世界に「時局」が介入しがちな時代に、先生は飄々（ひょうひょう）とそうしたものを受け流した」、「このような師にみちびかれたことは、私たちのしあわせであった」[74]と回想している。

澤が「ルバイヤート」訳の底本としたのは、

・「テヘラーン在ケターブ・フェルドウスィー書店版」「回教暦（ママ）一三〇六年（西暦一九二八年）刊、四四四連句を含む」[75]
・「マフフズル・ハック氏のカルカッ［タ］版」「二七一（ママ）連句を含む。一九三九年刊」[76]

で、「真作とおぼしい一二一連句だけを選り分けて訳出した」という。ただし実際には、［**附表2**］に示す通り、両底本のいずれにも含まれないルバーイーが用いられており、それらはデンマークの東洋学者クリステンセン Arthur Emmanuel Christensen（一八七五―一九四五年）の校訂版[77]に依拠したものと思われる。いや、むしろ沢英三訳の真の底本はクリステンセン版だと言うべきであろう。「真作とおぼしい一二一連句」の百二十一という数もクリステンセン版の収録ルバーイー数とぴたり一致し、そのすべてが翻訳の対象となっているからである。つまり、沢訳の第百一番までは、テヘラン版の排列順にクリステンセン版のルバーイー百十一首を選び出し、第百二番から第百二十一番までの二十首は、テヘラン版に含まれないクリステンセン版の残りの二十首を（おそらく順不同で）訳したのであろう。言い換えれば、沢訳とは排列を変えたクリステンセン版の全訳ということになる。カルカッタ版は補助的に参照されたのかもしれないが、仮にこの版が存在しなくても、沢訳の選択には何の影響もなかったことだろう。こうした事情にも拘わらず、訳者ががクリステンセン版の名前にまったく触れていないのは不可解である。この辺りをもう少し詳しく検討してみよう。

澤は訳詩の一部に「＊」印を付し、訳注の冒頭で次のように説明している。

＊印を付した個処はすべて、底本と他の版本とで語句の異なる個所を示すもの。この場合の訳文は底本の語句にこだわることなく、一般に真正と認められる分を選ぶことにした。ただし、互いに辞句が異なっていても、文意に大差がない場合、＊印を省略した。[78]

この「＊」印は全部で二十三か所を数えるが、二か所[79]を除いてすべてが「他の版本」、つまりクリステンセン版の訓みに従っている[80]。また、訳注で「底本では」「底本には」という説明を付した七箇所は、一か所[81]以外、すべて「一般に真正と認められる」クリステンセン版によって訳されている[82]。さらに、「文意に大差」が存在する場合でも、「＊」なしにクリステンセン版を用いている箇所は少なくない[83]。逆に、異同を注記せずにテヘラン版に従って訳していると思われる箇所もわずかだが存在する[84]。

しかし、底本の指示に関して残るこうした不明瞭な点はひとまず措いて、次に実際の訳詩ぶりを窺ってみよう。次に見本として掲げるのは、小川訳の底本となったヘダーヤト版第九十八歌の姉妹編とも言うべき第百歌である。

もしもくれるなら小麦パンを一片を
一ぴょうの酒と一脚（ひとあし）の羊肉を

そして風吹く荒野にお前と坐ったら
それは国王（ソルターン）にまさる栄華じゃないか

gar dast dehad ze maghz-e gandom nān-ī
az mey kadu-yī ze gūsfand-ī rān-ī
v-ān-gah man-o tō neshaste dar vīrānī
ʻeysh-ī bovad-ān na ḥadd-e har solṭān-ī[85]
（もしも手が、小麦粉のパンと／一匏の酒、それに羊の腿肉を与えてくれ／それから私とあなたがともに曠野に座すのなら／それはどんな王者にも達しえない愉楽となるだろう）

「手が……与えるなら」gar dast dehad を「くれるなら」と簡単に訳す一方、「荒野」vīrānī には「風吹く」という原文にはない形容詞を補っているが[86]、全体はほぼ原文通りの行分け散文訳で、音数にほとんど配慮がなされていないのは、沢訳全体に共通する特徴でもある。「ぴょう」は原語 “kadū”（瓢簞）に対応する「瓢（ひょう）」の仮名表記[87]であろうが、やはりここは漢字表記したいところである[88]。

冒頭の第一歌はそれぞれ次のごとくである。

明日を誰が保証してくれる
いま楽しませてくれ、この悲しい心を
月の光に酒をのめ、幾千回も幾万回も月は輝く
けれども、われわれはもうここにいない

chon ʻohde na-mī konad kas-ī fardā-rā
ḥāl-ī khosh kon īn del-e por sowdā-rā
mey nūsh be-nūr-e māh ey māh ke māh
besyār be-tābad-ō na-yābad mā-rā[89]
（誰も明日に責任を負わないのだから／今はこの憂鬱に満ちた心を楽しませてくれ／月の光で酒を飲め、おお月〔のような美女〕よ、なぜなら／月は何度も輝くが、我々を見出すことはないだろうから）

副詞「何度も」「多く」besyār を「幾千回も幾万回も」と強調して訳す一方、「おお月（のような美女）よ」ey māh という呼びかけは省略したため、原文で「月」māh を三回繰り返す面白さは反映されていない。ちなみに小川亮作は、ほぼ同じ原詩を次のように訳している。

あすの日が誰にいったい保證出來よう？
哀れな胸を今この時こそたのしくしよう。
月の君よ、さあ、月の下で酒をのもう、
われらは行くし、月はかぎりなくめぐって來よう！[90]

音数は「五七七／七八七／六八六／七八七」となるが、訳者流に長音節換算で一行が十に収まるように読むと、おそらく「あすの日が誰に」「哀れな胸を」「月の下で」のように、傍点部を長

く読みことが要請されるのだろう。原詩の副詞「多く」は「かぎりなく」と穏当に訳し、語末も「出來よう」「しよう」「來よう」と韻を踏む形にまとめているが、「われらは行くし」は原文の「我々を見出すことはないだろう」からはかなりかけ離れた印象である。

続く第二歌も小川訳の第七十九歌と原詩がほぼ共通で、

私が死んだら酒で湯灌して
酒と杯で引導わたしておくれ
もしも私に会いたかったら復活祭に来ておくれ
居酒屋のほこりの中を探しておくれ

chon fowt shavam be-bāde shūyīd ma-rā
talqīn ze sharāb-o jām gūyīd ma-rā
khāhīd be-rūz-e ḥashr yābīd ma-rā
dar khāk-e dar-ē meykade jūyīd ma-rā[91]

(死んだなら、私の体を酒で清め／読経代わりに酒と酒杯で讃えておくれ／裁きの日に私に会いたくなったなら／酒場の戸口の土のなかから私を探せ)

のように訳されている。形式上、第二・三・四句末を「おくれ」と同一語で統一するような例は、小川訳に比べると沢訳ではきわめて少ない[92]。内容の点では、イスラムの信仰における復活と最後の審判の日を意味する原文の「裁きの日」rūz-e ḥashr は、「復活祭」と訳すとキリスト教の祭日（イースター）と誤解される恐れがあるため、むしろ小川訳の「復活の日」あたりが適当であっただろう。また「土」khāk には確かに「埃」の意味もあるが、ここでは詩人の死骸が居酒屋の地面に埋まっているという含意があるので、やはり「土」としたいところである。しかし、小川訳が音数の関係で「おれを待て」としていた箇所は、原文により忠実に「探しておくれ」となっている。「読経」talqīn を「引導」と訳す先例は、すでに足利惇氏（あつうじ）訳に見られた[93]。

もう一編、小川訳の訳例として挙げた第九十五歌に対応する沢訳第百六歌も見ておこう。

生涯の終るときバグダードが何だバルフが何だ
さかずきが満たされたら飲め、甘くとも辛くとも
おれ達がみんな行ってしまっても月日はめぐる
月の終りから初めへ、初めから終りへと

chon ʻomr hamī ravad che baghdād-o che balkh
peymāne cho por shavad che shīrīn-o che talkh
mey khor ke pas-az man-ō to īn māh basī
az salkh be-ghorre āyad-az ghorre be salkh[94]

(命が尽きるのなら、バグダードでもバルフでも同じこと／杯が満たされるなら、甘くても苦くても同じこと／酒を飲め、私とお前の亡きあとも、この月はいつまでも／晦から朔へ、朔から晦へと巡り続けよう)

両底本の目立つ違いは三行目で、小川訳「たのしむがいゝ」khosh bāsh が沢訳では「飲め」mey khor となっている点であろう。澤はこれを原文二行目と繋げて「満たされたら飲め」と構文を変え、小川訳の「おれと君と」man-o tō を「おれ達がみんな」と一括、「月は……かけめぐる」māh . . . āyad を「月日はめぐる」と訳す。ここは、詩人が相手（恋人ないし友人）に語りかける場面なので、「おれ達」とするとその親密さの感情が希薄になり、人間全般を念頭に置いた一般論と受け取られる恐れがあるだろう。また、ヘダーヤト版にはなかった「この月」īn māh という指示形容詞が原文に加わっていることも考慮すると、おそらく二人は月を眺めつつ酒を酌んでおり、具体的に目の前の月が大空を何度も巡るという視覚的印象が喚起されるはずなので、単純に「月日」と抽象化してしまうのは訳としては問題かもしれない。“salkh” は太陰暦の最終日（三十日）、“gorre” は同じく太陰暦の第一日を意味する言葉であるから、「月の終りから初めへ、初めから終りへと」az salkh be-ghorre . . . az ghorre be salkh はまさに直訳である。ただ、前行の「月日」という訳語は、天体の月ではなく暦の月の印象を読者に与えかねないので、工夫が欲しいところである。その点、先に触れた通り、小川訳は「月は……朔望をかけめぐる」と、天体の「月」の映像も保存しつつ「朔望」の二文字で冗長さを巧みに回避している。

このように、詩として訳すという意識はないまま、原詩をそのまま直訳に近い散文に置き換えた観のある沢訳は、全体として個性や特徴を表に出さない、おとなしい訳になっていると評することができるだろう。ただ問題なのは、誤訳がきわめて多い点である。例えば第五十一歌は次のように訳されている。

かつて誰もばらのほおまで届いた者はないが
そのとげは心に届く
くしの歯が千々に裂けぬうちに
美しい人の巻毛に触れよ

dar dahr kas-ī be-gol-‘edhār-ī na-rasīd
tā bar del-ash-az zamāne khār-ī na-rasīd
chon shāne ke tā sar-ash be-ṣad shākh na-shod
dast-ash be-sar-ē zolf-e negār-ī na-rasīd (95)

（この世において、時代の手でその心に棘が刺さることなしには／誰一人薔薇色の頬の美女に達しえた者はいない／頭が一千もの歯に裂けぬうちは／その手が美女の巻き毛の先に届かない櫛と同じように）

望みを達するためには多くの苦難を耐え忍ばねばならぬという教えを、詩句の前半では薔薇（gol）と棘（khār）の比喩に託して語り、後半では櫛（shāne）を頭と手のある人間に見立てた上で、その歯（shākh）がぼろぼろにならない限り美女の巻き毛（zolf）を梳くことはできないという奇想を展開する。「～する限り」を意味する接続詞 “tā” の前後に否定詞 “na” を配置して「～しない限

り…ない」「〜して初めて…する」という構文を二回繰り返しているが、何故か訳者はそれとは異なる解釈をしている。[96]

もう一例は、第六十四歌の後半である。

この貪欲と困窮の両道の端に
何も残っていない、お前はもどって来なかった

hān bar sar-e īn do-rāhe-yē āz-o niyāz
chīz-ī na-ghdhārī ke na-mī āyī bāz[97]

（気をつけるがいい。この貪欲と窮乏の分岐点に／何一つ残すな、そなたは二度と戻ってこないのだから）

“na-ghdhārī”（残すな）という godhāshtan の否定命令形二人称単数を「残っていない」、“na-mī āyī”（来ないだろう）という āmadan の現在形二人称単数の否定を「来なかった」と過去形に訳すなど、単純な誤訳が眼につく。こうした例は他にも枚挙に遑がない。[98]

沢英三訳は『世界名詩集大成』に収められたあと、他の書物に再録されたり、独立した形で刊行されたりすることがなかったため、それほど多くの読者を持つには到らなかったようである。この点は小川亮作訳との大きな違いであろう。[99]

沢英三訳が出る直前の一九五八年四月、評論家の加藤周一（一九一九―二〇〇八年）は「「世界文學全集」について」で、「ルバイヤット」は、英國の一般讀書家にとつて世界文學の古典である」のに比べ、「日本での世界文學（ママ）での常識」はそれと異なっていることを指摘し、

現代日本の文學的世界地圖がアラビア・ペルシャ・インドの古典を抹殺して西歐の三流作家に壓倒的な注意を集中しているとすれば、そのようなもの、感じ方は、「アジアの一國としての日本」の立場とは全く無關係に文學の感じ方として、鈍いだろうということである。[100]

と批判していた。吉田健一もこれを受けて「例えばカイヤムの「ルバイヤット」のような名編が見向きもされないのはどういう訳か」[101]と記している。このあと一九六四年八月、筑摩書房の〈世界文学大系〉第68巻『アラビア・ペルシア集』に黒柳恒男（一九二五―二〇一四年）が、新たに発見されたテヘラン写本（のちに偽作と判明）とクリステンセン版に基づく「ルバイヤート」訳二百九十六首を発表、それに続いていくつかのペルシア語原典訳が現われ、原詩の全貌が日本語で読めるようになるまでには、まだしばらく時間がかかることになる。

［注］

＊本文における引用文中の小字による丸括弧内は引用者による補足、並字の丸括弧内は原文自体の注記である。

＊引用文中の引用者によるルビには丸括弧を付して、原ルビと区別した。

＊注において筆者の旧稿「明治日本の『ルバイヤート』」（『Odysseus』第二十号、二〇一六年三月、一―三七頁）、「大正日本の『ルバイヤート』」（『Odysseus』第二十一号、二〇一七年三月、一―三七頁）、「大正日本の『ルバイヤート』（続）」（『Odysseus』第二十二号、二〇一八年三月、一―四七頁）および「昭和日本の『ルバイヤート』（続）」（『Odysseus』第二十四号、二〇二〇年三月、一―三六頁）に言及する場合は、それぞれ「明治日本」「大正日本」「大正日本（続）」「昭和日本（続）」と略記する

（1）旧字・新仮名遣い。一九七九年九月の第二十三刷改版より現行の新字・新仮名遣い。初刊の刊行年月日は、奥付によると「昭和二十三年十二月三十日　第一刷發行」で、岩波文庫編集部編『岩波文庫総目録』（一九八七年七月）もそれに従うが、少なくとも一九六七年一月の第十三刷以降の奥付では「昭和二四年一月一五日　第一刷発行」となっている。挿絵は小林孔。

（2）『中央公論』第三十五年十一號、一九二〇年十月「說苑」一―四三頁。『大正日本』一二―一六頁。

（3）日露協會學校は、一九〇六年設立の日露協會が一九一七年に設けた露語講習所が起源。一九二〇年九月、後藤新平を創立委員長としてハルビンに日露協會學校設立（二二年に在外指定専門學校同等と認定）、滿洲國建国に伴い三三年に哈爾濱學院と改称。三九年、滿洲國立大學哈爾濱學院となり、四五年まで存続した。『日露協會學校一覽』一九二三年三月、「沿革」三―六頁。

『哈爾濱学院史　一九二〇～一九四五』（一九八七年六月、「索引」七九七頁、「年表」八二六頁）には、小川は一九三〇年四月入学、三三年三月卒業の「第十一期」生とあるが、一九四〇年三月に同学院入学、四三年十二月に繰り上げ卒業した第二十一期生・内村剛介（一九二〇―二〇〇九年。本名は内藤操）によると、実際は二九年に入学、「歌手加藤登紀子の父幸四郎と同年で入学していながら」「一年遅れて卒業」したという。内村剛介「［一篇の詩 My Favorite Song］露都ハルビンのルバイ」『新潮』第九十八巻三号、一九九八年三月、一八五頁。のち「ハルビンのルバイ」として、同『見るべきほどのことは見つ』恵雅堂出版、二〇〇二年六月、七八頁。『内村剛介著作集』第一巻、恵雅堂出版、二〇〇八年八月、五〇七―〇八頁。

（4）この時期に石川啄木（一八八六―一九一二年）の短歌三百首、詩二十編のロシア語訳を完成させ、近く出版の予定との報道があるが、結局刊行はされなかったらしい。「啄木の詩」露譯も完成――小川書記生一年の苦心」『朝日新聞』一九三六年九月三日、第七面。

（5）『外務省職員録』昭和十五年十月一日現在、外務大臣官房人事課、二五頁。『外務省職員録』（13）、昭和十八年八月一日現在、外務大臣官房人事課、一四頁。

小川亮作の個人史については、同じ県立村上高等学校の同窓生による以下の諸文献を参照した。これらには、岩波文庫版『ルバイヤート』の挿絵画家でモダンアート会員であった小林孔（一九二七―二〇〇六年）による回想も含まれている。

・遠藤孝夫「ルバイヤートと小川亮作（上・中・下）」『新潟日報』一九八一年九月十二・十三・十五日、第九面。

・本間次郎『ペルシャの華』近代文芸社、二〇〇四年七月、第四章「小川亮作と「ルバイヤート」――名訳への軌跡」、第五章「小川亮作四十年忌に寄す」。

テヘラン留学時代と外務省勤務時代の小川の面影は、それぞれ以下の文献に印象的な回想がある。

・井上正幸編『わが回想のイラン――井上英二遺稿集』私家版、一九八六年十二月、一八頁（テヘランではロシア語を生かして白系ロシア人の家庭に下宿する）、一二八―二九頁（帰国命令に反撥して、飲酒の末に下宿の食堂を荒らした逸話）。

・前嶋信次『アラビア学への途――わが人生のシルクロード』

日本放送出版協会、一九八二年六月、三七―三九頁「『ルバイヤート』の訳者の後ろ姿」。「戦闘帽に国民服、巻脚絆という姿で訪ねて来」て『大東亞民話集』への寄稿を依頼されたという逸話。

（6）澤英三「在職廿七年間の回顧と今後の方針」『アーリヤ學會々報』第十五號、大阪外國語大學印度語學部、一九四九年六月、五頁。

（7）「序」に「本調書は當課勤務小川書記生が、在アフガニスタン國帝國公使館に在勤當時作成せるものなるが、ア國事情を知るに好箇の資料と認めらるるに付茲に之を上梓す」とある。

（8）扉に「本調書ハ當課屬小川亮作ノ作成に係ル」とある。

（9）『支那、南洋及印度の回教徒』の増補・改訂版。

（10）本書「解説」二〇三頁によると、収録十二話のうち七話を小川が担当。「十二のお話は私達二人が、イランやアフガニスタンできいた昔ばなしのうちでも一番有名な面白いもの」とあるが、実際にイラン人から聞き取って採話したのか、それとも先行するフランス語訳やロシア語訳の説話集（その編者・訳者名や標題が列挙されている）によったのかは不明。川崎珪一も小川のあと書記生としてイランに留学、日本・アフガニスタン協会常任理事などを務めた。遠藤孝夫「ルバイヤートと小川亮作（下）」。

なお小川訳はのち、柳田國男・川端康成監修、關敬吾・石田英一郎共編『世界の昔ばなし』（河出書房、一九五〇年七月、八七―九五頁）、同監修、關敬吾・石田英一郎・徳永康元・会田由責任編集『世界民話全集』六（近東篇、河出書房、一九五四年六月、二―九二頁）にも収録された。

（11）グリボエードフ Aleksandr S. Griboedov（一七九五―一八二九年）はロシアの劇作家・外交官。アラビア語やペルシア語を習得し、一八一七年外務省に入る。一八年にはロシア使節団の書記官としてペルシアに赴き、二九年に再びペルシアに赴任するが、ロシアの拡張政策に反対する群衆に大使館で襲われて死亡。『智慧の悲しみ』*Gore ot uma*（二四年完成、二七年初演）はその代表作。著者のペルシアとの繋がりが、小川をしてこの訳をなさしめる動機になったのかどうかは不明。

（12）Ṣādeq Hedāyat, *Tarāne-hā-ye Khayyām*, Tehran: Amīr Kabīr, 1934.

（13）ボドレー写本百五十八首のヘロン・アレン校訂版による全訳は、前注（2）の荒木茂譯によって、またニコラ版・ホワインフィールド版はその多くを英訳したマッカーシー版に基づく片野文吉訳（開文館、一九一四年三月）によって、それぞれまがりなりにも紹介されていた。『大正日本』七―一六頁。ヘロン・アレン校訂版、ニコラ版、ホワインフィールド版の書誌は以下の通り。

・*The Ruba'iyat of Omar Khayyām, Being a Facsimile of the Manuscript in the Bodleian Library at Oxford, with a Transcript into Modern Persian Characters*, Translated, with an Introduction and Notes, and a Bibliography, by Edward Heron-Allen, London: H. S. Nichols, 1898.

・*Les Quatrains de Khèyam*, traduits du Persan par J. B. Nicolas, Paris: L'Imprimerie Impériale, 1867.

・*The Quatrains of Omar Khayyám*, the Persian Text with an English Verse Translation, by E. H. Whinfield, London: Trübner & Co., 1883; Second Edition, Corrected and Enlarged, London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Limited, 1901.

なお小川が岩波文庫版「解説」において、全百四十三歌はヘダーヤトが「ボードレイ寫本中から」検出した（一五三頁、改版一六六頁）としているのは不正確な記述であろう。

（14）『回教圏』第五巻十一號、一九四一年十一月、八―一九頁、五九頁。この概説は、のちに岩波文庫版「解説」に生かされた。

（15）『回教圏』第八巻四―七號、一九四四年五―六、八―九月、二七―三二頁、三七―四一頁、二八―三〇頁、三二―三四頁。

（16）『回教圏』第八巻四號、三二頁。

(17) Sādeq Hedāyat, p. 74.
(18) 二六頁（改版二六頁）。
(19) 「解説」一五四―五五頁（改版一六七頁）。
(20) 「解説」一四九頁（改版一六〇頁）。元の図式にあったアクセント記号は、目下の議論には関係しないので省略した。なお改版では、促音や拗音に捨て仮名（小字）を用いる方式に置き換えられている。本稿でも、これ以降同様の図式を掲げる場合には、この方式に倣うこととする。
(21) 改版では「……」に置き換えられている。一般にペルシア詩の各半句末尾の詩脚の最後の音節はいわゆる「アンケプス」anceps で、「―」または「―（」のいずれも可能なことが前提されているため、通常は「―」で代替する。Finn Thiesen, *A Manual of Classical Persian Prosody*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1982, p. 18, § 41.
(22) ここでは「聲を出して誦して見る」（一四九頁。改版一六〇頁）ことが前提されているので、単純に平仮名表記したときの文字数ではなく、音声学上の「モーラ」mora（拍）ないし音節数を数える方が適切だっただろう。掲出の例の「21・20・19・21」という文字数は、モーラでは「20・19・19・21」、音節では「16・15・16・18」となる。
(23) 「解説」一四八頁（改版一五九頁）。
(24) アラブ詩においては、音節ではなく母音の有無と長短による韻律の数え方が一般的である。ただし、欧米の東洋学者はこれを機械的に音節に置き換えて考える。
(25) 具体的なルバーイーの韻律は、顫調八詩脚（hazaj-e motham-man）の変形で、伝統的には次のように表示される。第一・第三詩脚に二種類、第二詩脚に三種類、第四詩脚は二種類（表示上一種類）存在する。ただし、前掲の Finn Thiesen はこれと異なる分析を試みている。

― ― ((	― ― ((
― (― (	― (― (
― ― ―	― ― ―
	―

(26) 初出は『國民之友』第五卷五十八號、一八八九年八月、夏季附錄「藻鹽草」。のち、森鷗外『水沫集』春陽堂、一八九二年七月、附錄。
(27) 小堀桂一郎『西學東漸の門――森鷗外研究』朝日出版社、一九七六年十月、五三―八〇頁。初出は同『『於母影』の詩学」『比較文學研究』第二十五號、一九七四年三月、二七―三九頁。例えば、有名なゲーテ Johann Wolfgang Goethe（一七四九―一八三二年）の「ミニヨンの歌」は、原詩の十音節を日本語の十音（モーラ）に対応させ、「「レモン」の木は花さきくらき林の中に」のように訳されている。
(28) 数え方にもよるが、全百四十三首の四行詩のうちで、四行中二行の末尾が同音（脚韻）ないし同一語句で終わるのは五十二首（三七％）、三行または四行の末尾が同音ないし同一語句になっているのは五十七首（三九％）で、全体のほぼ八割近くを占めている。なお、「でない」「でない」「なさい」「なさい」（第九十四歌）や「あり」「ない」「あり」「ない」（第百六歌）のように同一語句の末尾が二組揃っている場合は、便宜上後者に含めて数えた。
(29) 七七頁（改版七八頁）。「荒屋」のルビは初版には欠けているが、改版によって補った。
(30) Hedāyat, p. 100.「明治日本」一一頁にボドレー写本第百四十九番から同一原典を引いている。
(31) 一詩脚が長音節換算三つ分になるような長音節（―）と短音節（⏑）の排列は十三通り存在するが、このうち「(― (((」と「(― (―」のみは用いられていない。
(32) 七五頁（改版七五頁）。「朔望」には、改版で「さくぼう」のル

ビ、「バグダード」「バルク」には初版・改版とも註が付されている。「朔」「望」はそれぞれ陰暦の第一日と十五日、新月と満月を指す。「朔望」は『漢書』以来の中国の歴史書に見られる言葉で、この両日に天子への拝謁が行なわれた。

(33) Hedāyat, p. 99.「明治日本」一二頁にボドレー写本第四十七番からほぼ同一の原典を引いている。

(34)『回教圏』第八巻七號、一九四四年九月、三二頁。

(35) 六七頁(改版六七頁)。改版では「湯灌」に「ゆかん」のルビが追加されている。

(36) Hedāyat, p. 93.

(37) 以下に例示する。

・「土のうてな」←「土の宴会場」tarabkhāne-ye khāk(第一歌)。

・「格別變化があったか」←「威厳も栄光も増さなかった」jāh-o jalāl-ash na-fzūd(第三歌)。

・「またの世に地獄がある」←「ハイヤームは地獄に堕ちる」khayyām . . . dūzakhī khāhad būd(第六歌)。

・「そのみなもとをつきとめた」←「この究明の真珠に穴を穿った」īn gowhar-e tahqīq be-soft(第八歌)。

・「心して見れば」←「心せよ、叡智の糸の先端を見失うな」hān tā sar-e reshte-yē kherad gom na-konī(第九歌)。

・「早や燃えつきてしまった」←「眠り込んだ」dar khāb shodand(第十二歌)。

・「知慧の結晶をもとめては」←「意味の真珠に穴を穿った」dorre ma'nī softand(第十四歌)。

・「この玉の緒の切れ目」←「我らが人生の存在の縦糸に対する横糸」v-az tār-e vojūd-e 'omr-e mā pūd-ī(第十八歌)。

・「何でも心のままになる自由な宇宙」←「自由な人が心の願いにたやすく到達できる別の宇宙」falak-ē degar . . . k-āzāde be-kāme-del rasīdī āsān(第二十五歌)。

・「われも君も、人の掌の中の蠟に似て、／思いのままに弄ばれるばかりだ」←「私とあなたの事柄は、私とあなたの思い通りに／自分自身の手でさえ蠟で作ることができない」kār-ē man-o tō chonān-ke ra'y-ē man-o to-st / az mūm be-dast-e khīsh ham na-tvān kard(第二十七歌)。

・「追い立てるのになぜ連れて來たのか?」←「一人を奪い去ると別の一人を連れてくる」na-nhand be-jā tā na-robāyand degar(第二十八歌)。

・「酌む酒の苦さを知ったら」←「我々がこの世で何を苦しんでいるのか知ったら」agar be-dānand ke mā / az dahr che mī-kashīm(同右)。

・「地軸よ、地軸よ」←「おお大地よ」vey khāk(第三十九歌)。

・「一匹の蠅——風とともに來て風とともに去る」←「一匹の蠅が現われては消える」ānad magas-ī padīd-o nā-peydā shod(第四十一歌)。

・「形よい掌」←「形よい頭や脚や掌」sar-o sāq-e nāzanīn-ō kaf-e dast(第四十四歌)。

・「道學者の言うことなどに耳を傾けるものでない」←「賢者が信じない事柄を信ずるな」ma-grāy be-dān ke 'aqelān na-grāyand(第四十五歌)。

・「この野邊を」←「そなたのように」cho tō(同右)。

・「摘むべき花は早く摘むがよい、身を摘まれぬうちに」←「自分自身の分け前を奪うがいい、そなたの身も奪われるのだから」be-rbāy naṣīb-e khīsh ke-t be-rbāyand(同右)。

・「このはたごやに」←「この分岐点に」bar sar-e īn do-rāhe(第四十六歌)。

・「われらの骨が朽ちたころ」←「他人の墓の煉瓦のために」ze barāye khesht-e gūr-ē degarān(第五十七歌)。

・「お前もそんなにされるのだ!」←「私もお前のようだった、お前もまた私のようになるだろう」man chon to bodam to nīz chon man bāshī(第六十七歌)。

・「昨日」←「一昨日」parīr（第六十九歌）。
・「こじきの足も」←「こじきの手も」az dast-e gedāy（第七十一歌）。
・「壺の首と足」←「把手と首」daste-o sar（同右）。
・「千も二千もの土器（かわらけ）がならべてあったよ」←「二千もの壺が喋ったり黙ったりするのを私は見た」dīdam do hazār kūze gūyā-yo khamūsh（第七十三歌）。
・「形見」←「持参金」「婚資」kābīn（第七十五歌）。
・「あの酒壺」←「一マンの酒盃の酒」mey-e jām-e yek-man-ī（第七十七歌）。＊「マン」man は重量単位。
・「そこばくの酒」←「二つの酒杯」do jām-e mey（同右）
・「束縛（きずな）を解き放って」←「三回離婚宣言をして」se ṭalāq . . . khāham dād（同右）。
・「白骨が土と化したら」←「わがありさまを人々の教訓とせよ」ahvāl-e ma-rā ʻebrat-e mardom sāzīd（第七十八歌）。
・「氣でも觸れたか」←「お前は酔っている」mast-ī（第八十六歌）。
・「違った人となぜ交るか？」←「他人の罠に捕らわれる」be-dām-ē degar-ī pā bastī（同右）。
・「おれは天國の住人なのか、それとも／地獄に落ちる身なのか」←「私を創ったあの方が／私を天国の住人にするのか、それとも醜い地獄の住人にするのか」ma-rā ān-ke seresht / az ahl-e behesht kard yā dūzakh-e zesht（第九十二歌）。
・「いつまで舊慣にとらわれているのか、賢者よ？」←「いつまで私は新旧を望み、恐れようか」tā key ze qadīm-o mohdath-om-mīd-am-o bīm（第九十三歌）。
・「寄る年の憂いの波にさらわれてしまった」←「わが憂いは有名になった」gham-e man boland āvāz shode-st（第九十七歌）。
・「相宿の客は一人も目がさめぬよう／立ち去った客もかえって來ぬように！」←「ここにいる者たちは誰一人長くはとどまらず／立ち去った者は誰一人戻ってこないから」k-ān-hā ke be-jāy-and na-pāyand kas-ī / v-ān-hā ke shodand kas na-mī-āyad bāz（第百十五歌）。
・「わが心の偶像」←「幸運な美女」ṣanam-ē farrokh pey（第百十六歌）。
・「千萬」←「数十万」ṣad hazārān（同右）。
・「恥や外聞の醜い殻」←「名誉と名声のこのグラス」v-īn shīshe-ye nām-o nang（第百十七歌）。
・「世の煩いも天國ののぞみもよそに」←「モスクを気にせず天国からも自由に」āsūde ze masjed-and-o fāregh ze behesht（第百十九歌）。
・「遠慮せば」←「そなたが眺めているまに」tā dar negarī（第百二十一歌）。
・「チューリップの乙女の」←「機会があればチューリップの頬の乙女と」bā lāle rokhī agar to-rā forṣat hast（第百二十二歌）。
・「どうせいつかは」←「突然」nāgāh（同右）。
・「君の番が來るのはいつか判らぬぞ」←「君自身の番は他人から回ってこないだろう」nowbat be-to khod na-yāmadī az degarān（第百二十四歌）。
・「人にはもったいない」←「人を恥じる」az kas-ī dārad nang（第百二十七歌）。
・「銀露」←「水銀」sīmāb（第百三十二歌）。
・「物にくらんだ目をさませ！」←「気をつけろ、幸運の覚醒は夢だから」hosh dār ke bīdārī-ye dowlat khāb-ast（同右）。
・「君も浮かれる」←「友も酔う」yārān sar mast（第百三十三歌）。

(38) 二五頁（改版二五頁）。改版では「好」に「よしみ」のルビが追加されている。

(39) Hedāyat, p. 74.

(40) 七六頁（改版七六頁）。改版では「齢」（新字体）に「よわい」のルビが追加されている。

(41) Hedāyat, p. 100.

(42) 九〇頁（改版九二頁）。
(43) Hedāyat, p. 104.
(44) 第三十二歌＝三四頁（改版三四頁）。Hedāyat, p. 77. 第百三十一歌＝九八頁（改版一〇〇頁）。Hedāyat, p. 109. 他の類例を挙げる。
・「かれもまたわれらとあわれは同じ」←「かれはそなたより千倍もあわれ」az to hazār bār bīchāre-tar-st（第三十四歌）。
・「あゝ、そのむかし帝王が出御の玉座」←「王たちが平身低頭した謁見殿」bar dargah-e ū shahān nehādandī rū（第五十六歌）。
(45) 二四頁（改版二四頁）。改版は「りんね」「わ」のルビを追加。Hedāyat, p. 73.
(46) 七三頁（改版七三頁）。改版は「れんごく」のルビを追加。Hedāyat, p. 98.
(47) 岩波文庫編集部編『岩波文庫総目録』iv頁によると、一九五〇年一月に★一つ三十円、以後少しずつ引き上げられ、一九七三年十月には★一つ七十円になった。
(48) 例えば、東京タイムズ社社長を務めた岡村二一（にいち）氏（一九〇一―七八年）はこの「一冊の小さい本を贈られ」「この本のとりこになってしまった」と述べ、さまざまな訳書があるなかで「欲をいえばきりはないが、私はこの訳本がいちばんすぐれていると思う」と評価する。「［一冊の本142］救いの道を見出す――格調高いペシミズム」『朝日新聞』一九六三年十一月十七日、第十八面。のち朝日新聞東京本社学芸部編『一冊の本』雪華社、一九六七年九月、三三五―三七頁。
(49) 例えば戦後に新設された高等学校社会科の「世界史」教科書の一つ、江口朴郎『世界史A』（秀英出版、一九六三年四月文部省検定済、一九六四年三月発行）には、「十世紀以後、西アジアにはイランふうのイスラム文化が成長した。フィルドゥーシー（九二〇〜一〇二五？）がイラン民族の伝統的歴史を大叙事詩「王の書（シャーナーマ）」にまとめたのをはじめ、オマル＝ハイヤーム（一〇四〇？〜一一二三）・サアジー（？〜一二九一）らのペルシア語詩人が輩出し、ペルシア語の歴史が書かれた」（第一部「近代以前の世界」、第三章「イスラム世界の形成と展開」イラン文化とアラブ文化。原文は横組みで算用数字使用）とある本文に対し、江口朴郎『世界史A教授資料』（秀英出版、一九六四年六月、六一頁）は次のような解説を加える。

48．オマル＝ハイヤーム「墓の中から酒の香が立ち上るほど、そして墓場へやってくる酒飲みも、その香に酔いしれて倒れるほど、ああそんなにも酒を飲みたいもの！」といった酒や恋に人世の楽しみをみいだそうとした歌は、大伴旅人の「酒を讃むる歌」を連想させておもしろい。

この引用は小川亮作訳、第八十番から（一部改変して）なされている。筆者は、本『教授資料』執筆協力者の一人で、当時都立深川高等学校で社会科を担当していた三木亘氏（一九二五―二〇一六年）であろう。
(50) 例えば、吉田健一「一本の酒」（初出は『熊本日日新聞』一九五七年四月二十三日夕刊、第一面［甘酸っぱい味38］。のち、一部改変し、旧漢字新仮名遣いで『甘酸っぱい味』新潮社、一九五七年八月、一〇二頁。さらに新漢字旧仮名遣いに改めて『吉田健一集成』6〔随筆Ⅱ〕、新潮社、一九九四年二月、七八頁）では、

荒野にゐても、一塊のパンと一瓶の水があり、そしてお前が傍で歌つてゐてくれれば、自分はそれ以上に何も望まないといふ意味の句が出て来る。我々ならばそれを読んで直ぐに、顔回の一簞の食と一瓢の飲のことが頭に浮ぶ。

と記し、「邯鄲〔3〕」（『あまカラ』第百二十六号、一九六二年二月、四四頁。のち、『残光』中央公論社、一九六三年七月、一八一頁。『吉田健一集成』8〔短篇小説〕、新潮社、一九九三年十月、一九

三―九四頁。各表記に異同あり）にも、「カイヤムの「ルバイヤット」ではパンと水、それから女が一人に本が一冊といふことになつてゐたのを思ひ出した」とある。

(51) 吉田健一「［わがグループ］最後のレジスタンス――鉢の木会」『東京新聞』一九五五年四月十六日、第八面［文化］。のち、『吉田健一集成』5（随筆I）、新潮社、一九九四年一月、二三七頁。後者では旧仮名遣いを使用するなど、表記に異同あり。

(52) 六六頁。のち、『定本佐藤春夫全集』第25巻（評論・随筆7）、臨川書店、二〇〇〇年六月、一六四頁。

(53) 六七―六八頁。『全集』一六四頁（「篇」は異体字「篇」を使用）。「将進酒」は「酒を将げ進む」または「将に酒を進めんとす」を意味する、飲酒の楽しみを歌った詩。もともと鐃歌と呼ばれる漢代の軍楽の歌曲名で、唐代以降に楽府題の一つとなった。李白や李賀の作品が有名。

(54) 六九頁。『全集』一六五頁。

(55) 六四頁。『全集』一六三頁（「編」は新字体「編」を使用）。

(56) 「解説」一五四頁（改版一六六頁）。

(57) 内村剛介「［わたしの一冊の本］オマル・ハイヤーム著『ルバイヤート』」『エグゼクティブ』第八十二号、一九七一年六月、三八頁。のち、同『愚図の系譜』白馬書房、一九七三年二月、四二〇頁。「テヘランの『ルバイヤート』」として『内村剛介著作集』第一巻、五〇四頁。

(58) 注（3）で前出の内村剛介「［一篇の詩 My Favorite Song］露都ハルビンのルバイ」一八五頁。のち「ハルビンのルバイ」として同『見るべきほどのことは見つ』七七―七八頁。『内村剛介著作集』第一巻、五〇七頁。再録では、「（傍点内村）」は削除されている。

(59) 安藤孝行『唱和の遊び』三九頁。

(60) 普及版は北村一挿絵、丘書房、一九八〇年六月。第二刷、白雲山房、一九八一年七月。豪華版は下村良之介銅版画、白雲山房、一九八一年十月。初出はおまある　はいああむ／安藤孝行訳「歌集　るばいああと」として『水甕』第六十二巻一号（新年研究特集号）、一九七五年一月、四七―五三頁。初出と普及版・豪華版では表記等にかなりの異同がある。

(61) 「歌集　るばいああと」後記、五三頁。

(62) 普及版「あとがき」二一頁。豪華版附属小冊子『るばいやあと　あとがき』二六頁。

(63) 沢英三訳「ルバイヤート」『世界名詩集大成』18（東洋篇）、平凡社、一九六〇年五月、三四五―五七頁。

(64) 高橋明「インド・パキスタン語学科」『大阪外国語大学70年史』同編集委員会編集、同刊行会発行、一九九二年十一月、二九〇―九八頁。澤英三「在職廿七年間の回顧と今後の方針」。

(65) ペルシア文字によるウルドゥー語の文法書。澤「在職廿七年の回顧と今後の方針」九―一〇頁によれば、文部省の支援を得て、本書のためにペルシア語活字の作成に澤自身が携わり、夏休みに上京して神田橋の三秀舎印刷工場で工員に混じって「悪い活字の取替作業に従事」、「著者自ら工場入りをして働く」のは前代未聞のことと言われたそうである。

(66) ペルシア文字に続いて梵字（ヒンディー文字＝デーヴァナーガリー文字）の活字を大阪の天業社社主・出間照久氏に作成してもらい、最初に使用した書籍という。書籍は戦争時の空襲で焼失。

(67) デーヴァナーガリー文字による「ヒンディーを本体、ウルドゥーを従属的」にした文法書。

(68) 著者名は「沢英三」と新字体使用。

(69) ペルシア文字・デーヴァナーガリー文字の代わりにローマ字使用。

(70) ヒンディー語の文法書。

(71) 澤英三譯『ゴレスターン』「まえがき」三頁。

(72) 澤「在職廿七年間の回顧と今後の方針」五―六頁。

(73) 井上正幸編『わが回想のイラン』三三三頁。

(74) 陳舜臣『道半ば』集英社、二〇〇三年九月、八三―八四頁。初出は、同「道半ば――自伝」第八回（戦いはじまる）、『陳舜臣中国ライブラリー』22（中国五千年）「月報」8、集英社、一九九九年十二月、九頁。

陳舜臣が一九四三年九月、大阪外國語學校を繰り上げ卒業し、同校の西南亞細亞語研究所助手になった頃から「ペルシャ語を熱心に勉強した」のも『ルバイヤート』を読むためであったという。『陳舜臣中国ライブラリー』30（桃源郷）、集英社、二〇〇一年十月、七五四頁「年譜」。当時から始めていたらしい日本語訳は「筐底（きょうてい）に秘して、青春の日の思い出として封じこめるべきだ思っ」ていたが、のちに偶然のことで刊行に至った。陳舜臣『ルバイヤート』集英社、二〇〇四年二月、九頁。

陳と『ルバイヤート』を含むイスラム世界との関連については、福田義昭「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象（3）――神戸篇（後篇）陳舜臣」『アジア文化研究所研究年報』第五十二号、二〇一八年二月、一―二二頁（のち、同『昭和文学のなかの在日ムスリム』東洋大学アジア文化研究所、二〇二〇年二月、四五―六〇頁）に詳しい。

(75) 沢英三「解説」『世界名詩集大成』18（東洋篇）、二一頁。「回教暦」とあるのは「イラン太陽暦」の誤記であろう。原典は *Robā-ʿīyāt-e Ḥakīm ʿOmar-e Khayyām*, Tehran: Ketābkhāne-ye Ferdowsī, 1306（大阪大学外国語図書館蔵書）。刊行年月日は、表紙には一三〇六年ティール（四）月十四日、扉には一三〇五年エスファンド（十二）月十四日とある。以下、本稿では「テヘラン版」と略記する。

(76) 沢英三「解説」二一頁。［　］内は引用者による補い。原典は *The Rubâʿîyât of ʿUmar-i-Khayyâm*, Persian Text Edited from a Manuscript Dated 911 A.H.（1605 A.D.）in the Collection of Professor S. Najîb Ashraf Nadvî, with a Facsimile of the Manuscript by M. Mahfûz-ul-Haq, Calcutta: The Asiatic Society, 1939. 収録歌数は「二七一連句」とあるが、実際は二百六首で、そのほかにパトナの（現フダー・バフシュ）東洋学公立図書館所蔵写本から十六首（Appendix A）、テヘランの国会（現イスラム議会）図書館所蔵写本より十一首（Appendix B）が加えられている。以下、本稿では「カルカッタ版」と略記する。

(77) Arthur Christensen, *Critical Studies in the Rubāʿiyāt of ʿUmar-i-Khayyām: A Revised Text with English Translation*, Copenhagen: Andr. Fred. Høst & Søn, 1927. 全百二十一首を収録。以下、本稿では「クリステンセン版」と略記する。

(78) 「訳注」三五七頁。

(79) 第二十七歌「すみれの葉」barg-e banafshe は底本（テヘラン版）の訓み。クリステンセン版の shākh-e banafshe「すみれの枝」は採用せず。第五十八歌「酒」bāde は底本の訓み。クリステンセン版の bād「風」は採用せず。

(80) 以下、沢英三訳とそれに対応するクリステンセン版の原語（歌番号）―テヘラン版の訳と原語（歌番号）の順に記す。

- 第四歌「おお友よ」ey dūst (74)―「君が酒を飲まぬとしても」gar mey na-khorī (8).
- 第四歌「尊大ぶるな」gharre ma-shav (74)―「君は自慢する」fakhr be-dīn konī (8).
- 第五歌「おれ達の仲間は酒と石の長椅子、廃墟のかまど」mā vō mey vō maṣṭabe vō tūn-e kharāb (66)―「ノの廃墟の片隅でおれ達の仲間は酒と恋人」mā vō mey-o maʿshūq dar-īn konj-e kharāb (15).
- 第五歌「魂や衣を抵当に飲んで」jān-ō del-o jām-o jāme dar rahn-e sharāb (66)―「名前と魂と衣を抵当に飲んで」nām-ō del-o jām-o jāme marhūn-e sharāb (15).
- 第九歌「それなのに何で復活の日に私を焼きたがる」pas sūkhtan-ē qiyāmat-az bahr-e che khāst (90)―「それなのに復活の

日に焼くのは何故なのか」pas sūkhtan-ē rūz-e qiyāmat ze kojā-st (28).

・第十一歌「いとしいものの花の顔を焦れていた」v-andar ṭalab-ē rūy-e negār-ī būd-ast (38)—「美人の巻き毛の先に捕らわれていた」dar band-e sar-ē zolf-e negār-ī būd-ast (31).

・第二十歌「二日の間、私は悲しみを知らなかった」hargaz gham-e dō rūz ma-rā yād na-gasht (37)—「生きている限り、私は二日に関して思い煩うことはないだろう」tā man bāsham gham-ē do rūzē na-khoram (55). ＊クリステンセン版の直訳は「二日に関しては、私は決して不安を覚えなかった」。

・第二十二歌「善果を結んだのなら何故破壊するのだ／創造物が失敗とわかったら一体誰の手落ちだ」gar nīk-āmad shekastan-az bahr-e che būd / var nīk na-yāmad-īn ṣovar ʿeyb-e kerā-st (85)—「この形がうまくゆかなかったなら誰の手落ちだ／うまくいったら何のために破壊を望むのか」gar z-ān-ke bad-āmad-īn ṣovar ʿeyb-e kerā-st / gar nīk bovad kharābi-yaz bahr-e che khāst (63).

・第二十三歌「酒を飲め／こんな物語は語っても語ってもつきぬ話」mey khor ke chonīn fasāne-hā kūtah nīst (61)—「悲しいかな、この物語もまた短くはない」afsūs ke īn fasāne ham kūtah nīst (64).

・第二十四歌「酒を飲め、短い人生の多くを眠ってしまうから」mey nūsh ke ʿomr-hā-t mī bāyad khoft (59)—「起きよ、土の下で眠らなければならぬから」bar khīz ke zīr-e khāk mī bāyad khoft (66).

・第三十五歌「ほんの束の間、魂を天外に飛ばすのだ」khāham ke dam-ī ze khīshtan bāz raham (84)—「魂を忘我の境地まで持ち上げたい」khāham ke be bīkhodī bar-āram nafs-ī (101).

・第四十三歌「じっとしているな」fāregh ma-neshīn (12)—「我々には心地よい」khosh mā-rā (137).

・第四十六歌「気をつけておくれ」zenhār (98)—「おお親しい友よ」ey ham-nafasān (147).

・第六十九歌「「私もまたお前と同じ飲んだくれだったんだよ／さあ、しばし一緒に楽しもうよ」」ʿomr-ī cho to būde am dam-ī bā man sāz (65)—「酒を飲め、この世に君は再び戻ってこないから」mey khor ke be-dīn jahān na-mī ā'ī bāz (258).

・第七十歌「たとえじゃない、ほんとうの事だ／われわれは戯れの一かけらであり」az rūy-e ḥaqīqat-ī na az rūy-e majāz / mā lo'batakān-īm-o falak lo'bat-bāz (6)—テヘラン版 (259) では第一・第二対句が逆転。

・第七十一歌「明日の日が無くても悲しむな」ān ghoṣṣe ma-khor ke nīst gardī fardā (3)—「この世の事柄の結末は無であるから」chon ʿāqebat-ē kār-e jahān nīsti-yast (273). ＊クリステンセン版の直訳は「明日、お前が無になることを悲しむな」。

・第七十八歌「死の手で毛をむしられた鳥のように」va-z dast-e ajal cho morgh-e par-kande (40)—「人生の希望の土台を根こそぎにされる」va-z bīkh-e omīd-e ʿomr bar-kande (317).

・第八十八歌「人生の縦糸と横糸は何」va-z tār-e vojūd-e ʿomr-e mā pūd-ī kū (114)—「我らが人生の希望の縦糸に対し横糸はどこにあるのか」va-z tār-e omīd-e ʿomr-e mā pūd-ī kū (369).

・第八十八歌「天の車輪の中に浄い魂はあえぎつつ」dar chanbar-e charkh jān-e chandīn pākān (114)—「この世の優美な人々の多くの頭と足が」chandīn sar-o pāy-e nāzenīnān-e jahān (369).

・第九十九歌「こんな生と寂滅のうちに」andarīn kown-o-fasād (34)—「この荒廃した修道院（＝現世）に」andarīn deyr-e kharāb (434).

(81) 第八十六歌「善い名で知られるのは良い」nīk-ast be-nām-e nīk mashhūr shodan (366) について、「底本では nāk (*sic*) ast「良い」であるに対し、一般の異本では nang ast「恥だ」となっている。後者が真物らしいが底本に従った」と注記がある。実際、クリス

テンセン版は nang-ast（111）と訓む。注記の“nâk”は“nīk”の誤記。あえてクリステンセン版に従わなかったのは、二行目にも「悲しむのは恥」‘ār-ast . . . ranjūr shodan とあるので、繰り返しを避けるためであろう。

（82） 以下、沢英三訳とそれに対応するクリステンセン版の原語（歌番号）—注において沢が示すテヘラン版の訳と原語（歌番号）の順に記す。

・第四十七歌「天輪」charkh-e falak（70）—「金星と月」zohre o mah（155）.

・第五十九歌「百の心と信仰に値する」ṣad del-ō dīn arzad（8）—「信仰を持つ千人に値する」hazār mard bā dīn arzad（225）.

・同「現世に、紅玉の酒よりほかに何がある」joz bādē la'l nīst dar rūy-e zamīn（8）—「地球面で酒よりも楽しい何があるか」dar rūy-e zamīn chī-st ze bādē khoshtar（225）.

・第七十三歌「時代は」ayyām-e zamāne（31）—「ハイヤームは」khayyām zamāne（281）. ＊「ハイヤームよ」と呼びかけに取るべきであろう。

・第七十八歌「願望」amal（40）—「死」ajal（317）.

・第八十二歌「現象」aḥvāl（113）—「秘密」「神秘」asrār（346）.

（83） 以下、沢英三訳とそれに対応するクリステンセン版の原語（歌番号）—テヘラン版の訳と原語（歌番号）の順に示す。

・第七歌「悲しい」zār（89）—「再び」bāz（18）.

・第十四歌「そよ風」nasīm（23）—「露」shab-nam（41）.

・第十六歌「ペンの主」ostād-e qalam（21）—「運命の主」ostād-e qaḍā（45）.

・第十七歌「じ免だ」bīzār shodam（64）—「絶望していない」nowmīd na-yam（48）. ＊「じ免だ」は「うんざりだ」が直訳。

・同「ハイヤームが地獄の住民だなんて言うのは誰だ／天国や地獄から帰った者があるっていうのか」khayyām ke goft dūzakhī khāhad būd / kē raft be-dūzakh-ō ke āmad ze behesht —「今後、私は白銀の胸を持つ拝火寺院の若者と一緒に／地獄であろうと天国であろうと、酒と恋人を望もう」z-īn pas man-o sīm-bar javānān-e kenesht / mey khāham-o ma'shūqe che dūzakh che behesht.

・第十九歌「この一、二の呼吸」īn yek do nafas（82）—「この一呼吸」īn yek nafas-ī（51）.

・第二十歌「私の生涯」nowbat-e 'umr-am（37）—「私とあなたの生涯」'umr-e man-ō tō（55）.

・第二十一歌「希望の仲買人」dallāl-e amal（67）—「運命の仲買人」dallāl-e qaḍā（62）.

・第二十八歌「壊滅の神秘」asrār-e fanā（15）—「神の神秘」asrār-e khodā（72）.

・第二十九歌「このなぞ」īn ma'nī（80）—「この世界」īn 'ālam（77）. ＊ ma'nī の直訳は「意味」だが、これを「なぞ」と訳したのは mo'ammā と読み違えた可能性がある。

・第三十歌「宿命」taqdīr（91）—「太初の日」rūz-e azal（79）.

・第三十一歌「帯」kamar-ī（58）—「通過」ghodhar-ī（92）.

・第三十二歌「見るだろう」bīnī（11）—「なるだろう」bāshad（95）.

・第三十四歌「糧（かて）と偶像と酒」qūt-i-yo bot-i-yo bāde-ī（55）—「酒杯と偶像とリュート」jām-i-yo bot-i-yo barbaṭ-ī（99）.

・第三十七歌「理知」'aql（83）—「愛」'eshq（107）.

・第四十一歌「叫び」na're（88）—「服従」「礼拝」tā'at（115）.

・第四十三歌「つめ」chang（12）—「手」dast（137）.

・第五十六歌「酒とミルクと蜜」mey-o shīr-o angabīn（4）—「澄んだ酒と蜜」mey-e nāb-o angabīn（204）.

・第六十歌「名もなく住んだ者」ān-kas-ī ke ma'rūf na-shod（103）—「一瞬も生きなかった者」yek nafas zende na-būd（237）.

・第六十二歌「新しい土」tāze gel-ī（68）—「土の断片」pāre-gel-ī（240）.

・第六十三歌「借り住居」'āriyat（102）—「結局」'āqebar（243）.

＊ただし、テヘラン版末尾の誤植訂正一覧では、“ʿāqebat”→“ʿāyat” (*sic*) となっている。後者が“ʿāriyat”の誤植とすれば、クリステンセン版との異同は解消する。

・第六十四歌「秘密」rāz (5)—「再び」bāz (245).

・同「貪欲と困窮」āz-o niyāz (5)—「秘密と困窮」rāz-o niyāz (245).

・第六十六歌「天と地の頭」sar-e aflāk-o jahān (56)—「この世の天の頭」sar-e aflāk-e jahān (254).

・第七十四歌「何で忠告するのだ、それに値しない私なのに」pand-am che dehī ke qābel-ē pand na-yam (24)—「私を自由にせよ、束縛は私にふさわしくないから」āzād-am kon ke lāyeq-ē band na-yam (297).

・第七十五歌「道連れとなろう」ham-safar-īm (26)—「等しくなろう」sar be-sar-īm (298).

・第八十一歌「るり色の大理石の」firūze rokhām (108)—「瑠璃色の」firūzē fām (342).

・第八十九歌「坐れ[美女よ]」neshīn botā (35)—「坐って盃を持て」neshīn piyāle kash (371). ＊ブラケット内は引用者の補足。

・第九十五歌「その日はバラートの夜よりも良いのだ」ān-rūz beh-az shab-ē barāt (116)—「その日はバラートの夜となるだろう」ān-rūz bovad shab-ē barāt (411).

・第百歌「一ぴょうの酒」az mey kadu-yī (28)—「二マンの酒」va-z mey do man-ī (436). ＊「マン」は重量単位。

・同「お前と坐ったら」man-o tō neshaste (28)—「月のような頬の美女と坐ったら」bā māh-rokh-ī neshaste (436).

(84) 次の二か所はその可能性がある。

・第三十九歌「心の中に愛の火を持たぬ者は」は、クリステンセン版「(神が) なかで愛情を捏ねた心はすべて」har del ke dar-ū mehr-o maḥabbat be-seresht (79) ではなく、テヘラン版「(神が) なかで愛情を捏ねなかった心はすべて」har del ke dar-ū mehr-o maḥabbat na-seresht (110) に依拠しているように思われる。

・第四十九歌「幸福が空しさの中に飲まれてしまわぬうちに」は、クリステンセン版「部分が全体に融合する前に」z-ān pīsh ke jozv-hā be-kol peyvandad (99) ではなく、テヘラン版「部分が土に融合する前に」z-ān pīsh ke jozv-hā be-gel peyvandad (189) の訳のように思われる。

(85) Christensen, pp. 67–68, no. 28. これはボドレー写本の第百五十五番に対応する。『明治日本』一〇頁。注 (83) に注記した通り、テヘラン版は詩句に異同があり、ニコラ版やホワインフィールド版とほぼ同一である。『大正日本』九頁にローマ字転写がある。

(86) 他にも第二十四歌で、原語“ʿomr-hā”(人生) に「短い」、第二十六歌で、原語“kesht”(畑) に「陽炎(かげろう)もえる」、第二十七歌で原語“dasht-ī ke lāle-zārī būd-ast”(チューリップ咲く草原) に「眼も彩に」という修飾語を補っている。

(87) 「一瓢」は『論語』に典拠のある言葉で、矢野峰人訳や小川忠藏訳に先例がある。『大正日本(続)』九、一六頁。

(88) 全体として沢訳は漢字表記より仮名表記(しばしば傍点つき)を好む傾向にある。以下は前半六十歌よりの例である——第二・四十二歌「ほこり」、第三・四十五・四十九歌「さかずき」、第四歌「ざんげ」、第五・二十一歌「かまど」、第六歌「きつね」「かもしか」「ろ馬」、第七歌「しとね」、第八歌「憂うつ」、第十二歌「ほのお」、第十四・二十四・四十九・五十一・五十三歌「ばら」、第二十一歌「はさみ」、第二十七歌「すみれ」、第四十三歌「つめ」、第四十四歌「ぶどう」、第四十六歌「こはく」「ぶどう」、第五十一歌「ほお」「とげ」「くし」、第五十六歌「ひとみ」。

(89) Christensen, pp. 77–78, no. 50.

(90) 第百十二歌、八九頁(改版九一頁)。原文は Hedāyat, p. 104. クリステンセン版と比べ、konad → shavad; īn del-e por → to īn del-ē; be-nūr-e māh → be māh-tāb, be-tābad → be-gardad と異同がある。

(91) Christensen, p. 89, no. 76. 注(36)に引いたヘダーヤト版と比べると、fowt shavam → dar ghodharam; ze sharāb-o jām → ze sharāb-e nāb と異同がある。

(92) 四行中の二行の末尾を同一語ないし同音で揃えているのは、全百二十一首中三十六首(三〇%)、三行末を揃えているのは九首(〇・〇七%)、四行末とも同一語「うれしい」にしているのは第百十七歌の一例のみ。前注(28)で示したように、小川訳で全体のほぼ八割が二行から四行末を同一語句ないし同音にしているのとは対照的である。

(93) 『昭和日本(続)』二二一—二三頁。

(94) Christensen, pp. 96–97, no, 93. ヘダーヤト版と比べると、hamī ravad → be-sar rasad, mey khor → khosh bāsh, pas-az → ba'd-az, īn māh → māh と異同がある。

(95) Christensen, pp. 68–69, no. 30.

(96) クリステンセンの英訳 "No one has ever made his way to a rosy cheek, but a thorm . . . made its way to his heart" (p. 114) の除外構文を誤解して訳した可能性がある。

(97) Christensen, pp. 57–58, no. 5.

(98) 問題や疑問の残る他の箇所を挙げておく。丸括弧内の算用数字はクリステンセン版の歌番号を示す。なお、『世界名詩集大成』の版面の制約で、原文の一行に対応する訳文をなるべく二十文字以内に収める必要があったという事情は考慮すべきかもしれない。

・第三歌「さかずきに刻まれた筋に驚異が鎮座している」dar khaṭṭ-e piyāle āyat-ī hast moqīm (41)—「驚異」āyat はここでは むしろ『『コーラン』の聖句」の意味。

・第十八歌「苦楽をともにした杯」tarkīb-e piyāle-yī ke dar ham peyvast (77)—「彼(神)が組み合わせた杯の形」が直訳。

・第二十一歌「ハイヤームが理知のヴェールをつくろっていた」khayyām ke kheym-hā-ye hekmat mī dūkht (67)—「ハイヤーム」すなわち「天幕作り」との関連で「ヴェール」kheym は「天幕」と訳すべきところ。

・第二十三歌「心の誇りのほかに住家は無いのだ」joz dar del-e khāk hīch manzel-gah nīst (61)→「土のなかを除いて安息地は存在しない」が直訳。「誇り」は「埃」の誤植か。

・第二十八歌「壊滅の神秘の幕無しに奈落へ行ってしまうのだ」dar parde-ye asrār-e fanā khāhī raft (15)→「消滅の神秘の幕のなかに入って行くだろう」が直訳。「幕無しに」では意味不明。

・第四十四歌「もう一杯、二マン半飲んで心を豊かにしよう」khod-rā be-do raṭl mey ghanī khāham kard (75)→「二ラトルの酒で自分自身を豊かにしよう」が直訳。「マン」man は注(37)で前出、「ラトル」raṭl も重量単位で、イランではほぼ同義とされる。

Walther Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, Leiden / Köln: E. J. Brill, 1970, p. 32.

何故「二マン半」と訳されているのか不明だが、クリステンセン訳 "I will make myself rich with two half *mans* of wine" (p. 123) に引かれ、これを "two and a half *mans*" と誤読した可能性もある。

・第四十五歌「明日という友のために何を苦しむ」ghom-e fardā-ye ḥarīfān che khorī (97)→「友の明日を何故悲しむのか」。

・第四十六歌「杯から力がわくように」ma-rā ze jām-e mey qūt konīd (98)→「酒杯から私に(酒を)注いでくれ」が直訳。沢訳は "qūt" (食糧)を "qovvat" (力)と読んでいるようだが、それでは韻律に合わない。

・第五十二歌「居酒屋でおれ達は酒づかり、浄めの沐浴なしに」dar meykade joz be-mey voḍū na-tvān kard (14)→「居酒屋では酒による以外は浄めができない」。

・第五十五歌「良からぬ人と酌み交わしたら酒を損う(そこな)」nāqeṣ bovad-ān-ke bāde rā naqṣ konad (100)→「酒を欠いている(また

は「酒を非難する」）のは不完全な人間であろう」。

・第六十歌「この二つ戸口の居酒屋に人が住み始めて／やがてまた、生命の宿を空け渡してゆくのだ」chon ḥāṣel-e ādam-ī dar-īn deyr-e do dar / joz khon-ē del-ō dādan-e jān nīst degar (103)→「この二つ扉の居酒屋（＝現世）において人間が得る収穫とは／心臓の血（を流すこと）と魂を与える（＝死ぬ）こと以外に何もないのだから」。

・第六十一歌「アダム」adham (101)→「アドハム」。

・第六十七歌「さてもずるい奴だよわれわれは／朝な夕なの五つの祈りをとなえて」kardīm degar shīve-ye rendī āghāz / takbīr hamī zanīm bar panj namāz (72)→「我々はまた放蕩の道を開始した／五回の礼拝は放棄しよう」。takbīr zadan は「神は偉大なり」と叫ぶ意味から転じて、「（世俗の事柄を）放棄する」tark kardan, rahā kardan, dast shostan az chīzī 意味になる。ニコラ版の注 (p. 117)、ヘロン＝アレン校訂版第九十九歌の注 (p. 216) および以下を参照。

‘Alī Akbar Dehkhodā, *Loghat Nāme*, 15 vols., Tehran: Dānesh-gāh-e Tehrān, 1993–94, Vol. 4, p. 6046, s. v. “takbīr.”

・第八十三歌「酒を飲み人生に貪婪（どんらん）であれ、善をなせ」mey mī-khor-o rah mī-zan-o ehsān mī kon (57)→「酒を飲み、追い剝ぎを働き、善をなせ」が直訳。「善も悪も自由に行なえ」といった意味だとすると、「人生に貪婪であれ」はかなりの意訳であろう。

・第九十歌「唇と唇とを触れ合っても未だ血を流さない」lab bar lab-o dar miyāne khon ofādē (43)→「唇が唇に重なると、あいだで血が流される」。酒壜から杯に赤い酒が注がれる様子を「血が流される」と表現している。

・第九十一歌「人生のページは残り少なくなる」owrāq-e vojūd-e mā hamī-gardad tey (121)→「我等の人生の頁は閉じられる（または「操られる」）」。

・第九十二歌「賢しく鋭い思想家の栄誉も持たぬ」dar nokte-ye zīrakān-e dānā na-rasī (33)→「そなたが学識豊かな賢者たちの到達点に達することはない」。“nokte” には「精妙な論点」「名言」「秘密」といった意味があるが、これを「栄誉」としたのは、クリステンセン訳の “the nice distinctions” (p. 115) に引かれたためかもしれない。

・第九十六歌「天国にお坐り、天国顔しながら」be-nshīn be be-hesht bā beheshtī rū ī (18)→「天国顔した美女と一緒に天国にお坐り」。

(99) 黒田三郎「恋する者と酒のみ――ルバイヤートにふれて」（『詩学』第二十一巻二号、一九六六年二月、八九―九三頁）には、沢訳と小川訳を対照して論じた箇所が見られる。

(100) 加藤周一「［文學直言］「世界文學全集」について」『文學界』第二十四巻四號、一九五八年四月、六頁。のち、『加藤周一著作集』6（近代日本の文学的伝統）、平凡社、一九七八年十二月、九二頁。後者では新字体を使用、「「ルバイヤット」を「『ルバーイヤート』」にするなどの異同が見られる。

(101) 吉田健一（禿山頑太）「［大波小波］賃仕事の翻訳全集」『東京新聞』一九五八年三月十七日、夕刊第八面。のち、『吉田健一集成』別巻、新潮社、一九九四年六月、一九八頁。

附表１　小川亮作訳原典対照表

小川訳	N	W	B	Ch	FGh	小川訳	N	W	B	Ch	FGh
1	13	12	—	—	5	38	—	219	—	—	95
2	117	145	—	—	—	39	21	25	—	78	12
3	157	176	51	94	60	40	42	—	—	—	26
4	383	427	143	33	161	41	—	—	—	—	97
5	49	52	—	—	—	42	232	271	—	—	—
6	—	111	18	64	21	43	—	290	—	—	115
7	—	389	—	110	—	44	38	42	19	77	22
8	—	—	—	—	14	45	—	—	—	—	69
9	—	214	58	—	59	46	217	258	—	5	111
10	—	—	—	80	34	47	—	107	35	—	—
11	—	126	—	85	31	48	412	—	—	—	167
12	464	209	—	—	54	49	—	129	—	—	—
13	384	428	140	—	—	50	231	270	94	6	—
14	—	226	—	—	—	51	123	150	—	—	64
15	338	377	—	—	144	52	274	317	—	—	125
16	24	28	11	—	—	53	67	70	—	—	17
17	—	490	157	34	174	54	69	72	—	44	7
18	351	393	130	114	150	55	237	277	—	—	114
19	—	—	—	—	—	56	350	392	—	115	149
20	—	—	—	—	—	57	349	391	—	—	151
21	122	149	53	—	—	58	—	—	—	—	50
22	400	442	—	—	163	59	—	—	—	—	112
23	—	—	—	103	—	60	370	414	135	—	154
24	107	137	—	—	57	61	70	73	—	89	8
25	340	379	—	—	145	62	—	—	—	51	24
26	31	35	31	91	—	63	59	62	—	81	51
27	—	—	—	—	74	64	348	390	129	35	152
28	195	240	—	—	101	65	—	—	—	—	—
29	389	431	—	27	160	66	354	396	—	—	166
30	—	221	—	—	—	67	404	446	146	36	164
31	—	—	—	21	—	68	433	468	—	—	173
32	216	257	95	—	—	69	—	493	—	—	—
33	—	507	154	—	172	70	395	437	—	—	177
34	95	96	41	—	48	71	431	466	—	117	171
35	128	155	—	—	63	72	28	32	9	38	15
36	125	152	—	—	62	73	243	283	103	—	117
37	—	353	121	—	134	74	297	334	—	—	—

小川訳	N	W	B	Ch	FGh	小川訳	N	W	B	Ch	FGh
75	56	59	—	—	45	110	463	208	62	70	73
76	460	360	—	—	132	111	94	—	—	—	44
77	181	196	—	75	—	112	8	7	5	50	2
78	136	160	—	—	—	113	106	136	60	97	66
79	7	6	—	76	—	114	426	463	—	—	—
80	14	17	—	—	—	115	235	—	—	47	—
81	115	—	—	—	—	116	455	484	—	118	178
82	290	330	116	40	—	117	294	332	118	—	—
83	—	234	83	—	—	118	153	174	67	—	—
84	—	216	50	48	—	119	—	—	—	—	39
85	264	307	—	—	—	120	—	112	17	23	—
86	441	473	—	—	—	121	—	—	—	—	37
87	64	67	—	11	42	122	40	44	—	—	27
88	168	185	—	4	87	123	189	—	—	—	—
89	169	—	—	—	88	124	325	366	—	—	138
90	—	108	34	—	41	125	—	254	—	—	106
91	—	—	—	—	—	126	359	426	131	—	—
92	92	94	40	—	43	127	252	—	—	31	118
93	284	324	112	9	127	128	402	444	—	121	158
94	—	110	21	—	—	129	155	—	—	—	—
95	105	134	47	93	53	130	269	312	—	26	121
96	421	—	—	—	—	131	418	457	—	—	—
97	—	—	—	—	—	132	54	57	—	—	—
98	413	452	149	—	—	133	—	106	36	—	47
99	300	336	120	—	—	134	—	119	—	13	—
100	461	—	—	—	—	135	26	30	12	62	10
101	76	78	—	—	—	136	—	—	—	—	—
102	47	50	—	—	—	137	366	411	136	—	155
103	372	415	—	—	—	138	—	—	—	—	—
104	336	375	—	—	141	139	—	274	100	65	—
105	267	310	108	—	122	140	242	282	102	3	116
106	—	—	—	—	—	141	—	—	—	—	—
107	103	133	—	—	—	142	90	92	33	58	—
108	20	24	—	—	—	143	165	183	—	—	81
109	—	—	—	—	—						

＊ 数字は歌番号を表わす。小川亮作訳の歌番号はヘダーヤト版（書誌情報は注 12）に同じ。
＊ 略語は以下の通り。
N: ニコラ版，W: ホワインフィールド版，B: ボドレー写本（いずれも書誌情報は注 13 参照）。
Ch: クリステンセン版（書誌情報は注 77 参照）
FGh: フォルーギー／ガニー版
Robāʿīyāt-e Ḥakīm Ḥayyām-e Nīshāpūrī, ed. Moḥammad ʿAlī Forūghī and Qāsem Ghanī, Tehran: Ketāb-e Farzān, 1983 [1942].

附表２　沢英三訳原典対照表

沢訳	T	C	Ch	N	W	H	沢訳	T	C	Ch	N	W	H
1	4	1	50	8	7	112	36	104	—	54	—	107	47
2	5	4	76	7	6	79	37	107	50	83	95	96	34
3	7	—	41	11	10	—	38	109	32	81	59	62	63
4	8	—	74	12	11	—	39	110	31	79	60	63	—
5	15	10	66	19	22	—	40	111	85	63	98	99	—
6	17	81	44	69	72	54	41	115	41	88	61	64	—
7	18	65	89	70	73	61	42	122	102	95	107	137	—
8	23	—	62	26	30	135	43	137	135	12	112	—	—
9	28	68	90	99	100	—	44	142	133	75	181	196	77
10	29	—	78	21	25	39	45	145	104	97	106	136	113
11	31	—	38	28	32	72	46	147	127	98	109	139	—
12	33	86	22	—	117	—	47	155	—	70	463	208	110
13	38	72	13	—	119	134	48	186	100	94	157	176	3
14	41	67	23	—	112	120	49	189	—	99	163	181	—
15	44	—	86	29	33	—	50	174	—	1	151	172	—
16	45	89	21	—	—	31	51	175	—	30	150	171	—
17	48	—	64	—	111	6	52	179	130	14	142	165	—
18	49	52	77	38	42	44	53	184	116	7	156	175	—
19	51	36	82	—	—	—	54	169	103	96	—	233	—
20	55	38	37	22	26	—	55	202	—	100	170	186	—
21	62	43	67	81	83	—	56	204	119	4	168	185	88
22	63	—	85	—	126	11	57	213	124	42	179	194	—
23	64	39	61	44	47	—	58	219	—	60	188	203	—
24	66	74	59	48	51	—	59	225	129	8	194	—	—
25	69	60	29	46	49	—	60	237	150	103	—	—	23
26	70	55	39	82	84	—	61	238	—	101	215	253	—
27	71	—	46	—	104	—	62	240	151	68	211	252	—
28	72	66	15	85	87	—	63	243	146	102	214	—	—
29	77	19	80	—	—	10	64	245	—	5	217	258	46
30	79	—	91	31	35	26	65	251	157	52	222	262	—
31	92	73	58	90	92	142	66	254	—	56	228	267	—
32	95	44	11	64	67	87	67	256	160	72	230	269	—
33	96	51	25	65	68	—	68	257	158	104	229	268	—
34	99	88	55	92	94	92	69	258	164	65	—	274	139
35	101	42	84	63	66	—	70	259	162	6	231	270	50

沢訳	T	C	Ch	N	W	H	沢訳	T	C	Ch	N	W	H
71	273	167	3	242	282	140	97	419	—	119	422	404	—
72	277	169	105	244	284	—	98	421	198	117	431	466	71
73	281	173	31	252	—	127	99	434	—	34	—	490	17
74	297	177	24	263	306	—	100	436	201	28	448	479	—
75	298	184	26	269	312	130	101	443	—	118	455	484	116
76	309	—	53	277	320	—	102	—	110	10	—	217	—
77	316	181	9	284	324	93	103	—	—	19	358	404	—
78	317	—	40	290	330	82	104	—	A12	47	235	—	115
79	326	—	106	—	—	—	105	—	145	69	196	—	—
80	338	178	107	299	—	—	106	117	98	93	105	134	95
81	342	—	108	315	347	—	107	—	186	110	—	389	7
82	346	—	113	322	365	—	108	—	87	92	91	93	—
83	351	192	57	327	368	—	109	—	63	2	93	95	—
84	352	189	112	—	387	—	110	—	—	16	200	244	—
85	365	—	71	344	382	—	111	—	105	17	—	—	—
86	366	—	111	345	383	—	112	—	132	20	180	195	—
87	367	—	115	350	392	56	113	—	203	27	389	431	29
88	369	195	114	351	393	18	114	—	35	32	—	110	—
89	371	197	35	348	390	64	115	—	—	45	359	426	—
90	380	—	43	363	408	—	116	—	108	48	—	216	84
91	392	—	121	402	444	128	117	—	48	49	—	—	—
92	400	—	33	383	427	4	118	—	37	51	—	—	62
93	404	—	120	410	450	—	119	—	—	73	—	304	—
94	406	—	36	404	446	67	120	—	84	87	—	—	—
95	411	—	116	415	454	—	121	293	—	109	270	313	—
96	415	202	18	420	459	—							

＊ 数字は歌番号を表わす。カルカッタ版の歌番号に付された “A” は “Appendix A” の略。
＊ 略語は以下の通り。
T: テヘラン版（書誌情報は注 75），C: カルカッタ版（書誌情報は注 76），Ch: クリステンセン版（書誌情報は注 77），N: ニコラ版，W: ホワインフィールド版（いずれも書誌情報は注 13），H: ヘダーヤト版（書誌情報は注 12）。